エピローグ

　これはエピローグなんて言うそんなヤワなもんじゃない。いきなり、何を言っているのか分からないだろうけど、要するに、まだ何も始まっていない。要されていないか。ともかく、何も始まろうともしていない。この先も何も起ころうともしない。ひょっとしたら、延々と本題に入らないかもしれない。マイナス無限大のトコロからの話であって、エピローグと言うにはほど遠く、エピローグに失礼だ。そんな雰囲気を感じ取ってもらいたいエピローグだ。

　どうだろう、既にやや訳の分からないこの感じ、何が言いたいんだコレ。的な？訳の分からない前段階。訳の分からない文章で、それでいて少し分かり難い、これから理解に苦しむ事象が連鎖する感じがしてきたかな？なんか残念なことなのだけど、こんな感じなんだ。これが準備体操なんだ。間違っていない。これで合っている。そうさ、これは訳がわからない世界の始まりなのさ。君の眼の前には訳の分からないことは、あるかい？ないのかい？だとしたら気付いていないだけかもね。よく考えてみればちょっとはそうかもって、思ってくれた？うんうん、訳の分からなさ加減を共感できるといいのだけど、こっちの世界は訳の分けらない事の集合体でと言ってもいいほど、びっしりと覆われている。どちらかというとそちらの世界よりはびっしりかも。こちらの世界を知るには、少し気持ちに余裕が無いと無理だと思う。でも大丈夫、

ここで巡り会えたのだから、きっと、その度量はあるだろうし、資質は十分に備わっていると思う。ここで、こうして出会えたからこそ、訳の分からないことを優しい心で受け入れる事ができようものだ。それは優しい。そして、美しい。

こんな感じなのだけど、僕は意外と訳の分かる方の人間だと思っている。君はどうだい。訳が分かる自信はあるかい。そうだね。君はそうだ。それで合っている。それは間違っていない。あ、そちらの世界の方が訳が分からないってことなら、それはご愁傷様。今度じっくり話を聞かせてもらいたいとも思う。そのまま放って置くのも精神衛生上よくない。

でも、まずはこっち側だね。そう遠くない未来に僕がいなくなって、訳の分からない事が訳の分からないままになるという恐れがあるからだ。別にそれで問題ないのだけど。って思うでしょ。それがそうでも無いと思うんだ。訳の分からない事を誰かが拾って集めて、ちょっとは何かのエネルギーにでも変えてくれないと、訳の分からないことで、溢れ返って、取り返しのつかない世界になってしまいかねない。だから僕はココに訳の分からない世界のヒトカケラを記し、変換されることを願おう。

いわば、訳の分からない事を吸いこんで、ぼぁっと何かに変えるガス交換だよ。肺の中にある肺胞とかっていう奴と、それに纏わりついた毛細血管がガス分圧の差という原理に従って行われる。これは無意識の中の意識で行われるらしい。副交感神経って奴が関係しているんだっけか。僕らは途絶えることなく、繰り返し行われる極めて重要なこの動作よって、キラメク世

界を感じている。吸って、取り込んで、吐き出す。三種類の要素で構成される。吸って吐くの二つの動作で三種類。なんか得した気分。

こういう一連の動作って、何ていうんだっけ？ここまで出かかっているんだけど、なんとなく思い出せない。

こういう動作の深い奴の事なんだけどね。

ブラックホールへようこそ

いつからだろうか、僕の周りが僕の理解を超える世界になったのは、少しずつ浸食されて、いつしか僕は滅びるんじゃないか？そう思う事が多くなってきた。ん？僕のこと？そうだね。名前は言えない。個人情報保護法うんぬんの関係だ。だけど、どんなことをしているかは、伝えることが出来る。紡績っていうの？糸を紡ぐ業種のこと。そういう仕事をしている。紡績っていうと、洋服の糸を作っている会社に思えるかもしれないが、世の中では糸っていう業種はとんでもなく飛躍していて、糸っていうか繊維っていうか、特殊な素材を作るという仕事になりつつある。最近は医療系の素材まで作っている。昔は糸を紡いでいるだけで少しは分かりやすかったんだろうけど、まぁこれも訳がわからない方の部類なのかな。でも最初に言った訳が分からないというのは、こういう事ではないから安心して欲しい。この難しさは紐解けば分かる部類のことだからで、訳がわからないという事とは少し違う。仕事については、企業秘密も多いから、あまり多くは語らないことにしておこう。時が来たら、少しづつ、どんなことをしているか分かってくると思う。僕はいたって真面目だよ。

今は仕事場に向かっている最中。同じ会社に勤める同僚の幼馴じみと一緒だ。

彼女は夕波　亜津子（ゆうなみ　あつこ）２６歳。こいつが、僕を悩ませている元凶といっ

ても過言ではない。そして、類は友を呼ぶと言う。訳の分からないことを強力に吸引している。

まるでブラックホールだ。ブラックホールとはありとあらゆるものが吸い込まれるという仕組みのアレだ。ブラックホールは質量が大きいものが密集した結果、巨大な重力を生む。地球なんて優しいもんだ。人間が立っていられる程度にしか、重力は無い。質量があるもの同士は全て引き合う。地球はまぁまぁ大きい質量なので、重力を感じる。そういう事らしい。いわゆる万有引力だ。もちろん夕波と僕との間にも引き合う力は発生している。微々たるものだ。だが、ブラックホールのそれは、比べ物にならない。重い質量であるが故に引き寄せるチカラってやつが、とんでもないことになっているらしい。なんでも近くを通るとその重力に物体は引き寄せられブラックホールの中へと飲み込まれる。なぜブラックなのかと言うとブラックホールの内部や周辺を通る光さえも、吸い寄せられ黒く見えてしまう。一度入ると抜け出せなさそうだ。ごく最近、どっかの偉い人たちが、ブラックホールの映像を捉えたらしい。記憶に新しい部類かな。とにかく、ありとあらゆるものを引き寄せるパワーを持っている。恐ろしい。その恐ろしいモノが夕波の持ち合わせた引力だ。

訳の分からないことを、訳の分かることにしようとするのは人間の本能みたいなものなんだろう。最近は夕波のおかげで、そういった人間の本質みたいなものを知る事さえ出来た。時間かかり過ぎか？もう、かれこれ２２年くらいになる。今思えば、小さいころから、その片鱗を見せていたと思うこともある。今日も相変わらずだ。見た目はいたって普通っていうか、まぁ

かわいい方かな。こんだけ一緒に居て、僕たちが付き合っていないのは不思議なくらいだろう。でも性格の不一致か何かのそういったものを感じるのか、絶妙な距離をおいていて、そういう中には発展しない。僕は夕波の全てを受け入れる器ではないというのもあるのだろう。

京阪電車の淀駅の近くに住居を構える僕らは同じ駅から乗って寝屋川市駅まで急行電車に揺られて、そこから、同じ京阪グループが運営するバスに乗って、近くの勤務先まで通う。寝屋川市駅からは歩いても行ける距離だが、あんまり歩きたくない。皆もそういうことってあるだろ？

電車に揺られる夕波は音楽を聴いているみたいだ。一緒に通ってはいるが、ずっと一緒に話している訳ではない。これくらいがいい距離感だ。これなら僕も気兼ねなく、座ることができた日は通勤電車で寝て過ごしたりもできる。誰にも席をゆずらないのはいかがなものかと思う。寝ていたらきっと、譲らなければならない人がいたりしたんだろうけど、寝たまま過ごしたのかもしれない。時々、気が付いたら夕波が違う所に座っていることがあって、きっと誰かにゆずってあげたので、そこに移動したのだろうなってそう思う事もあった。夕波は、その辺の事は、よく出来ている。関心。関心。

何の音楽を聴いているんだろう？少し気になる。今日は音楽に集中しているようだ。視力に問題の無い夕波は眼鏡をかけない。夕波は少し目をつむって、音楽の一音一音を確かめるように小刻みに顔を動かしているようにも見える。周りの人は夕波が小刻みに動いているようには

感じないだろう。普段なら髪は結うこともなく肩まであるので、いつもなら髪が小刻みに揺れていたのかもしれない。今日は、後ろで結んでいる。曲のテンポはだいぶゆっくり目で一秒に一回くらいの感覚で顔が微かに揺れる。黒のスーツの袖の先に握られたスマートフォンから音は出ているみたいだ。ケーブルはないのでブルートゥースか何かの無線接続でイヤフォーンとスマートフォンが繋がって音声を伝送しているようだ。手には、あまりみかけない形状のスマートフォーンを握っていて、画面は明るく点灯しているので、何やら表示されているけど動きはなさそう、夕波のスラっとした指は、動いておらず。見ているだけだ。きっと今聞いている音楽の情報が表示されているのだろう。僕は、何を聴いているのか少し気になり始めた。テンポが６０っていうとクラシックのゆっくり目の音楽って感じだな。例えばダフニスとクロエ第二組曲みたいなやつ。一楽章目では、十二連符がずっと続く奴ね。最初はピアニッシモで誰か気付いて！誰か聞いてくれぇ！ってなる奴。分からない人は検索してみて欲しい。

　少し覗くと大きな♪マークのある画面で曲名が書いてあるようだったが、そこにはアラビア文字が記されていた。マジでか。まただ。また。訳がわからないよ。夕波…。なんでアラビア文字なんだよ。嘘だろ。作者名のところもアラビア文字。なんでだよ！心の中の自分が漫才師がよく使うセンターマイクの横に立って、激しく突っ込んでいるよ。なんでだよ！アラブ圏の楽団が演奏する何かなのか？夕波？そうだよな。意外とテンポの遅い曲が流行っていたりするのか？謎過ぎる。

曲の長さは五分程度。朝から民族音楽とか、そんな奴か。なんか流行ってたっけアラビアの音楽。てんで思いつかない。誰一人思いつかない。知る訳がない。

それと、そのスマートフォンどこのだよ。画面の淵にアラビア文字が刻み込んである。スマホ自体に彫り込んである。普通そういうのってカバーで装飾するんじゃなかったっけ？これはこれで入れ墨みたいな要素がある。私は、この模様と共に生きていくみたいな。入れ墨の方が思い入れは強いか？とにかく、みたことねーよ。そのスマホの形状。わけわからねぇ。ひょっとしてアラビア圏のスマホなのか？それは日本で使えるのか？謎過ぎる。すると夕波が突然、迷惑にならないように小さな声で囁いてくる。

「なに、ジロジロ人のスマートフォン覗き込んでんの？」

あ、興奮してジロジロ見過ぎた。気付かれてしまった。

「あ、いや、何、聞いてんのかなと思って」

最初から、こうやって聞いとけばよかった。勝手にわけわからなくしてたのは僕の方だ。聞けば普通にアラビアの曲って教えてもらえたのかもしれない。いやはや僕としたことが、

「あ、そういうことか。なるほどね。ならいいわ」

えっ？教えてくれないの？何々その勿体ぶる感じ。この流れなら曲名言うでしょ。マジか今日も相変わらずの訳の分からない展開。こいつ、僕を弄（もてあそ）んでいるんだろ。でも、いま聞いておかないと、一生、謎のままになりかねない。ここは恥をしのんで聞いておくか。

いや、きかれたくないからアラビア文字にして、暗号化しているのかもしれない。しまった。アラビア語、勉強しておくんだった。くそっ、自分。くそっ。自分を戒める。右から左に流れるように記述する文字で構成されるアラビア語。確かに敷居は高いよなぁ。すると夕波が、再び。

「知りたいんでしょ。」

おー。察してきた。たまにはやるな！夕波。そう。それだ。

「まぁ気になるかな」

ちょっと、どっちでもよさげな雰囲気を出したが、実際は喉から手が出るほど知りたい。つうか、もう喉から手が出ている。

すると、囁くように夕波は言う。

「今日はねぇ。食パンを焼いてバター&マーマレードとヨーグルトにブルーベリーを入れて、それとコーヒーにミルク&シュガー。それと納豆」

え？何それ？食パン？バター&マーマレード。バターを塗ってからのマーマレードか？朝ごはんだろ？ソレ。ほら。出た。まただ。訳が分からん。どうなった曲のくだり！どうなってんだよ。そして、会話の流れ。流れてただろ会話。せせらぎのように流れてたはず！それがマーマレードだよ。どうなってんだよ。なんなら、おいしそうだよ。食べてぇよ！あれ？なんかおかしいな。変だな？あっ…納豆。納豆どこから出て来てんだよ。パン食で納豆をねじ込んでくるって、どうなってんだよ。食い合わせとしてはナカナカ。イカス。まぁやってる人もいるか。

でも夕波は今日はコーヒーにクリームと砂糖を入れたんだな。いつもは入れないのに珍しい。いやいやいや。関心してる場合かオレっ！馬鹿かオレっ！マーマレード！ヨーグルト！ブルーベリー！美味しそう。典型的な朝ごはん。そしてイン・ザ・納豆！ナットゥ！ＮＡＴＯ！北大西洋条約機構！納豆！心の中のネバネバが僕の中で躍動している。伸びたり縮んだり。

「そっか。納豆ね。身体に良さそうなこったで」

少し諦めに似た何かを感じながら、自然と返していた。待てよ。あのアラビア文字は朝ごはんに関する曲名になっているんじゃね？それで知りたいでしょ？か、それなら、普通な感じにも持っていける。いや、それは流石に無理矢理過ぎる！譲り過ぎだよ。流石に譲り過ぎ。どこまでおかしなことを補正しちゃってんだよ。オレ！なんか、正常な思考能力が麻痺してきている気がする。そこまで裏をかいた思考能力。オレは雀士か！棋士か！

そして、夕波は言う。

「ヨーグルトに入れてみたんだけど、納豆は合わないよね。」

うはっ。まじか！ヨーグルト！イン！そっか。夕波。流石だな。

「ところでさ、そのヘッドフォーンで何を聴いてるの？」

なんか、すんなり聞けた。勢いって奴だな。

「いまね。ドバイ気分を味わってるの。ドバイの流行り。なんか、分かんない曲」

あ、そういうことね。分かんないんだ。結局、分からない。そうだな。そりゃ訳が分かる訳

ない。何事にも理由があるもんだと思っていたが、ここのところは、そうでもないと思い始めた。理屈？屁理屈のひとつもあった方がいいような気さえする。俺は理屈を求めてる。欲している。理屈に渇きを覚えて砂漠を彷徨う冒険者だ。ドバイよ。砂漠ではなく、理屈をくれ。どうやったらＵＡＥ（アラブ首長国連邦）の流行りに乗っかれるんだ。ったく。そうこうしていると電車は枚方市駅に停車した。ここでまた人がどっと乗ってくる。枚方は大阪市内に勤務する人たちが、夜にひと時の眠りを経てまた大阪へ出向くためのベッドタウン。医療施設の関西医大付属病院もあって、イオン、蔦屋のＴ‐Ｓｉｔｅ、京阪百貨店、ショッピング施設も充実しているが、淀川へ続く道は、その先、国道１号線に向かっていて、関西医大前で渋滞が慢性的に発生する箇所でもある。その道は僕もよく車で通ることがある。いやなことを思い出したな。渋滞か。人々の営みがあって良いことかもしれない。人類皆兄弟とは上手く言ったもんだ。仲間がみんな同じ方向にむかって列を成している。渋滞に巻き込まれている自分も含めて、全員がこの社会を形成する仲間だ。これだけの人が同じ方向に向かっているなんて、素晴らしいことじゃないか。皆がいるから僕は生かされている。渋滞を恨むことなんてない。仲良く譲り合いだよ。いろいろ複雑なことを考えていると夕波がまた囁く。

「アレ…」

？

急にどうした？

夕波が小さく指を差す。指の方向は夕波の目線であって、僕には照準が合わないため、イマイチ何のことかわからない。指さす先を予測して視線を動かす。

そこには、小学生と思しき女の子が座っている。さっきまでは居なかったと思うので、どうやら枚方市駅から乗り込んで、運よく座れた子っぽい。本を開いて読んでいるようだ。ごく普通の賢い子って感じ。なぜ指を差す？何かおかしな点でもあるのかと、更に注視する。小学校1年生くらいだろうか？ものすごく小さくて愛らしい。まだこれから、沢山のことを学んでいくのだろう。先は険しいぞ。女の子。読書とは、実によくできた子だ。関心。関心。

ふと、本のタイトルに目をやる。「終活の極意がわかる１００のこと」

どういうことー？前途洋々とした小学生が終活？っていうか極意。極めるってことか？なんか心配過ぎる。ネグレクト。つまりは育児放棄虐待とか、そういう被害者じゃないか心配だ。家に帰ったら執拗な暴力を受ける家庭内虐待が待っているとか。心配だ。コンビニとかでよく売ってそうな装丁だ。１ページ目あたりから読み始めたところの様だ。まだ読み込んでいる訳では無さそう。終活への第一歩って感じか。たぶん、それが役に立つのはあと９０年くらい先だな。

しかし、流石は、ブラックホール夕波。訳の分からない事が吸い寄せられてくる。こういうのが好きなんだろうな。常に訳が分からなさそうな事に目配せしているんだろう。

僕は夕波の顔を見た。夕波も僕の方を見ていた。そして、僕は小さく頷いた。それを見た夕波

は満足そうに笑みを浮かべ、またスマートフォンに視線を落とす。いや、アラビア文字だからそれ、何を眺めてるんだろう。不思議だ。音楽を聴きながら別のこともできるだろうに、ずっと音楽アプリの表示を見ている。すると今度は、スマートフォンの音楽のどこを聴いているかが分かる指標、横向きの線上に丸ポッチがあって、その丸ポッチの位置が曲全体の何割かの位置にあるかという事が音楽の位置と連動し、調整できる操作絵柄なるものを触る。所謂、シークバーというやつだ。この丸ポッチを少し戻すような感じで指をなぞる。曲の再生位置を少し戻したようだ。すると、また小刻みにまた顔が揺れる。そして、しばらくするとまた、同じようにシークバーの位置を戻す操作する。どうやら、ドバイの流行りの音楽の曲のあるフレーズ部分がツボに入ったようだ繰り返し同じところを聴く。同じ場所を何回も聞くことができるアプリもあるんだけどな。まぁ今はそんなことをしてる場合でも無いのかもしれない。後で教えてやろう。そうやって数十ターンはしたか？京阪電車は速度を落とし駅に着いた。

僕たちが下りる寝屋川市駅だ。

ズ・ター・タ・ター

寝屋川市駅は乗る人も降りる人も多い。錯綜している。それが寝屋川。僕も早いところ寝屋川に移住しようと思っているところだ。人生の大半を通勤で過ごすのは、効率が悪い。部屋は狭くてもいい。実家と自分の部屋を上手く使えば、生活も楽だし、食料も実家から調達することが出来るし、ご飯も食べれる。家族も賛成してくれている。夕波はどう思っているんだろ。引っ越しとかしないか？夕波は既に一人暮らしを始めている。意味は分からないが実家の真正面のマンションに住んでいる。割かし訳が分からない。実家は十分に広いと聞いている。家族の仲も悪くなく。綺麗な家屋で今風の建造物でオシャレな感じだ。真正面にはマンションがあって、そこ一室を住みかにしている。

幼馴染で、一緒の会社で、一緒に通っているという、もう夫婦だろコレ。っていう感じではあるが社内では、全くそういう風にいじってくる人は居ない。

寝屋川市駅からは「タウンくる」という地域に根差した京阪バスが運営する路線バスがあるので、それを使う。運賃は百五十円。まぁまぁの出費だが会社が負担してくれるっていうので、甘えている。歩けって言われたら、歩ける。会社側からしたら交通費は痛い固定の出費だろう。

それを考えると、遠くから通って、歩けと言われれば歩ける道のりをバスに乗って出勤する

というのは何だか申し訳ない。職場の中には、このありがたさを感じていない人もいるようで、僕は、会社のことを思えば全員が、近くに住めば、会社の固定費は下がり、浮いた分を新たな投資に回すことができる。そして、それはゆくゆく給料として還元される。そんな気がしてならない。でも会社は人材こそ命と考え、ある程度は遠くからでもいい。交通費を出してでも働いて頂きたい。と、そう言っているのだ。持ちつ持たれつ。とは言え、感謝の気持ちは忘れない。我が社は、割かし柔軟で、このタウンくるという乗り物が不便なのも知っていて、駅に自転車を置いて通うことを認めている。いや、むしろ推進している。こちらも駐輪料金はかかるので、その分の負担を会社が補填してくれる仕組みだ。

実はこれから乗るタウンくるというバスは小さいバスで十席程度しかなく、立つ部分も少ない。それだけ利用する人が少ないって事だ。会社の人もこれを使う人はあまり居ない。基本的にバスを使う人は居ないかもしれないが、場合によっては、臨時でバスを使う人はいるっぽい。これは流石に自腹だ。おそらく雨や台風の時は有り難い乗り物だからだろう。バスは一時間に一本しかなく、遠回りをする順路なので、歩くより時間がかかる。そのため、歩きも推進していて、歩く人にも歩行通勤手当が出ている。バスの通勤の場合の2倍も出る。じゃ、歩き通勤ということにして、バスの定期券を買えばいいんじゃないかとも思えるが、毎日のように、近辺を自転車に乗ったり、バスに乗ったりして、通勤しているのが見つかれば、通勤手当を返納しろというペナルティがある。なんにしても2倍なら、歩き甲斐のある制度だ。辺鄙なトコロ

に会社があって申し訳ないって感じなのだろう。台風の日の前日にタクシー利用を認める御触れが出て、タクシー利用の領収書を出せば、それも手当として還元される。ナカナカの手厚さだ。寝屋川市駅のロータリーからはタクシーが待ってくれているので、実に有り難い。このあたりの手当てが充実しているという点では、いい会社だと思うけど、広くは知られていない。バスは今日も、案の定、数人しか乗らない。歩いた方が早いからな。

夕波も同じ通勤手段を選んでいるので、同じくバスに乗る。よく見るとイヤフォーンは外している。歩きながら音楽を聴くのは危ないから、外したのかもしれない。確かに言われてみれば、夕波は歩きながらイヤフォーンをしているところを見たことが無い。職場でも「ながら」作業は駄目という感じの標語があるくらいだ。意外と職場のルールは普段も守っているのかもしれない。

でも、小さく小刻みにリズムを打つのは変わらない。よくよく見ると口元が少し動いている。何を言っているんだろう。よく耳を澄ます。静寂の車内には、バスのエンジン音が響いているがかろうじて何を言っているか聞き取れそうだ。

「ズ・タ―・タ・タ―・(ウン)」

間を開けて、また

「ズ・タ―・タ・タ―・(ウン)」

なるほど、アラビア語の歌詞は分からないから、リズムだけか。さっきの曲なのか。あれだ

けローテーションさせりゃ頭からリズムが離れないよな。でも音程がない。ドラムの部分だけかな？テンポは遅い。電車の中で聞いていた曲のテンポと一致する。相当に気に入ったっぽいけど、どこにでもありそうな、リズムだ。夕波はこのリズムに夢中だ。それにしても、短い。気に入った部分としてはかなり短い。ズ・ター・タ・ター（ウン）だと一小節だな。しかもウンの部分はきっと休みであることを示す4分休符の部分だ。するっていうと、一小節の4分の3程度の長さだ。短い。短すぎる。心に刺さる部分が短い。これって普通なのか？魅力なさ過ぎだろ。ドバイの流行曲！って言うかもっと魅力あるだろ！ドバイっ！

？

ドバイの流行？ＵＡＥの流行じゃなくて？日本でいったら大阪で流行ってる曲ぐらいの感じか。首都のアブダビが東京としたらそんなもんか。ずいぶん狭い地域の流行りを持ってきたな。それが巡り巡って日本の大阪のこの地で、ズ・ター・タ・ター（ウン）だけが夕波の心に響いている。なんだか感慨深い。僕は咄嗟にスマートフォンを取り出し、検索をしてみた。

「ドバイ」・「流行」・「曲」っと。

おっ！

これは意外。日本語でめっちゃ出てくる。流行してる曲って、やっぱあるんだな。この一位の奴だろうか？濃い顔の男前が動画のサムネイルで一位のポジションにいる。今日、家に帰ってから聞いてみるか。ズ・ター・タ・ター（ウン）のところ探して見よう。でも、アラビア

文字が読めないのでなんていう曲なのか、さっぱりだ。翻訳してみるか？いやいや、追いかけるのはやめよう。ズ・タ―・タ・タ―・(ウン)も探しきれないだろうし。おうっ。危ない危ない。気が付いて良かった。夕波の背後を追いかけるなんて無理があり過ぎる。自分からブラックホールに片足を突っ込む必要はない。そこには何の論理もない世界が広がっているんだろう。僕はブラックホールの外側の人間でいたい。切にそう思う。

今のは、柔道で言ったら、一本を取られずに済んだ感じかな。なんとか、こらえて有効で防ぎ切ったっていう。そんな感じだ。耐えた。あのまま翻訳してたら、完全に身体の自由が利かなくなって、見事なまでに、宙を舞い、背中からズドンだ。

そうこうしていると、僕らの勤める紡績会社の開発センター近くに到着した。僕らは特に研究とか開発とかをする訳ではない。研究とか開発とかをしたときに出てくるデータを纏めて、その結果を研究チームに返す。そんな役目だ。なんだか研究とかをしないので簡単そうに思われるかもしれないけど、それなりに難しい仕事だと思っている。素材開発とは地味なことの積み重ねの上にあると言っても過言ではない。データを制するもの世界を制する。きっとそんな感じだ。まだ勤めて4年。見えていない事も多い。

最寄りのバス停からも、それなりに歩く。夕波は僕の前を歩いている。まだブツブツといっているような感じがする。小刻みに顔も揺れてるし。ズ・タ―・タ・タ―・(ウン)なんだろうきっと。よくよく見ると、顔の小刻みな揺れは歩くリズムと同期しているようだった。左足が拍子

の頭で、左が裏だ。器用なもんだ。夕波の才能はありとあらゆる所において人並外れているものがあるのは否めない。ちょっとは有効利用してほしいものだ。今は、この優れたリズム感は、異国の地で生まれたズ・ター・タ・ター・（ウン）のために使われている。

夕波がこの独特のリズムに憑りつかれているせいか、バスに乗ったところから、まったく会話はしていない。特に違和感は無い。いつもの感じだ。そうやって後ろをついて歩いていると、夕波の袂（たもと）から何か白い立方体が落ちた。それはコロコロと転がって僕の目の前にやってきた。夕波はそれに気づく様子も無い。仕方が無いなと、それを拾いあげようとしゃがみ込んだ。

え？サイコロ？

六の目がこちらを向いている。今は特に何かを抽選している訳でも無いので、六には意味がないのだけど、なんか持っている感はある。落としても六か。これが双六ならぐんぐん進む奴だぞコレ。と、思いながら、拾い上げ。それを夕波に返そうと僕は呼びかけた。

「夕波！」

僕の問いかけに夕波は振り向く。スッと顔と肩で振り返り、ギョロっとした目で睨み付ける。そして、また正面を向いた。

なんか気に触れたようだ。あれだ、例のズ・ター・タ・ター・（ウン）の邪魔をしてしまったのかも知れない。なんだよ。俺は拾ってあげたんだぞ。サイコロ。睨むことはないだろうに。

後で返そう。

そこへ気さくそうな透き通った声の持ち主が突然、声をかけてくる。

「君くん。おはよう」

まだ顔は見ていないけど、わかった。この声は、夕波に次ぐ訳わからんガールの藍さんだ。大愛　藍（おおいとし　あい）。この人は僕の職場の同僚で、1つ上の先輩にあたる。仕事の面でもよく教えてくれる立派な先輩なのだが。

「おお。こんなところで会うとは、やっぱこうなんていうか、同じ職場で働くモノ同士の引かれ合うモノがあるんだろうねぇ」

同じ出社時刻なのだから、通勤路になっている道で会うこともあるだろう。大げさな。引かれ合うのはブラックホールぐらいにして欲しいところだ。

「どうした君くん。なにか握りしめているようだけれど？」

僕はパッと手を開いた。僕の掌には、サイコロがある。

「おーサイコロか。朝からサイコロとは威勢が良いね」

と僕の肩をポンっと叩いて、前を歩く夕波の横へと躍り出た。

え？朝からサイコロ？威勢がいい？意味が分からない。だから藍さんは手強い。サイコロになんの疑問も抱かずにスルーできる才能。加えて威勢がいいという世の中の誰もが考えないような発想をちょい足し。流石過ぎる。

この登場により、僕は君くんと呼ばれている事が分かってしまった。そうだ、僕は何故だかキミクンと呼ばれている。君くんだ。僕にもちゃんとした名前はある。けれど、会社のみんなが君と呼ぶ。家族も、友達も皆が、君に更にくん付けして君くんと呼ぶ。君君だ。君を二回も続けて書くとゲシュタルト崩壊しそうな感じだ。えっゲシュタルト？あー、同じ漢字をいっぱい書くとそれが元々なんの意味だったか？それは文字なのか？分かり辛くなる現象。

気付けば、藍さんは夕波と少し話を始めていて、これには流石の夕波も、あのリズムを中断せざるを得ない。僕にはアレだけ睨み付けていたのに。

「おー。ズ・ター・タ・ター・（ウン）か。ドバイのね。いいね。」

藍さんの言葉に夕波はコクリと頷いている。

？

話がだいぶ進んでいるみたいだ。既に、ズ・ター・タ・ター・（ウン）を藍さんが受け入れたような口調だ。何があった？ぐぐぐ、しまった。流れがわからない。もうこんなことになっているのか？何をどう話してこの短時間でここまで受け入れて、理解してるんだ。普通じゃ無さ過ぎる。僕は開発センターのセキュリティーゲートをくぐっていく二人を見て立ち尽くしていた。

今日は今日で訳がわからない。

サイコロ

高校生くらいの年齢層で、その友達たちがこの思考なら、まぁ分かる。でも、もう僕らは二十も半ばだ。言わばいい歳をしているという年頃じゃないか？僕はそう思いながらリフッレッシュゾーンという名の休憩場所で缶ジュースを買っていた。疲れた。集計。大体は自動集計されるのだけれど、まだ自動で集計できない事も残っていて、ここは人海戦術という奴だ。この作業がたまに入ってくる。これが疲れる。僕らの部門は半導体の材料の成分を測定するための開発をしている。モノの良し悪しを見通すための集計によって、材料の調合は決まっていく。測定は大事だ。半導体ウェハに材料を塗布する装置のデータや、塗布された材料の測定という２つの仕組みにおいても、それぞれのログデータがデータベースというものに格納される。装置は高価なため、休ませておくのは勿体ない。綿密な処理スケジュールの上で、様々な実験が次々と行われる。だからデータは膨大になる。これらの様々なデータから特殊なデータの抜き出しをしたい時に、人海戦術が行われる。それもある程度は僕のような人間が組んだプログラムによって、解析が行われるので、自動化されている部分も多い。それでも、疲れる。

だからこそ、休息は必要だ。休み時間以外でも、こういった小休憩をとることは本人の裁量によって許可されている。ＶＤＴ作業における必要な休息量に従って僕は休んでいる。ＶＤＴっ

ていうのは、ビジュアル・ディスプレイ・ターミナルの略で要するにパソコンの作業のことだ。僕は立って飲み物が飲めるようなスペースにいる。ここのテーブルは、立ったままでも肘が付けるくらいの高さで、陸上競技トラックのような形になっている。このスペースのちょっと奥には座ってじっくり話し込めるような椅子とテーブルが用意されたスペースが広がっている。

使い方が異なる二つの空間で構成されている。僕のいる空間の壁側は飲食店のカウンターのような形状になっていて、テーブルの少し上には開閉可能な窓がついている。窓からはこの周辺を一望できる眺望が広がっている。奥側の壁も同じようになっているが低いテーブルになっていて、座ることが出来る。今は僕の目の前の窓の一つだけが開いていて、時折、気持ちのいい風が吹き込んでくる。僕は立って飲むこのスペースが好きだ。この立って飲むテーブルにもフットレストなるモノが取り付けられていて、足の片方をそこに掛けて休むことが出来る配慮が嬉しい。どちらかというとこちらをよく使う。このテーブルもっと評価されてもいいんじゃないか？などと、どうでも良いことに思いを馳せる。

そこへ夕波もやってきた。リフレッシュに来たか。

「はぁ〜」

とナカナカ深めのため息をくり出す。何をやっていたかは知らないが疲れてんだな。ちょっと値段の張るエナジードリンクのボタンをポンっと押した。商品は出てこない。当たり前だ。お金を入れていない。そして、ポンと押した夕波は、ボタンを押しながら僕の顔を見る。

なんだこの奢ってくれオーラは。お金は持ってるだろうに夕波も。なんで奢らにゃならんのだ。こういう時、僕はきっぱりNOと言える人間なのだ。

「嫌だよ。」

そうだ。言ってやった。女だから優しくされるというのは、当たり前だ。それはそれで良い事だと思う。それでもやはりここは譲れない。エナジードリンクは少し高いし、もうこれが飲みたいと示唆した状態で、顔色を窺われても困る。

すると、夕波は、ポケットからおもむろにガマぐちの小銭入れ財布を取り出し、お金を次々とねじ込んでいく。全部十円っぽい感じだ。よく見ていると気づき始めたがお金を投入する音にリズムが乗っている。そうアレだ。ズ・ター・タ・ター・(ウン)。どんだけ引きずってんだよ！そして次のズ・ター・タ・ター・(ウン)でちょうどエナジードリンクが買える金額に到達した。そして、夕波は購入ボタンに手をかけ。ズ・ター・タ・ター・(ウン)とボタンを押した。実際には、購入したドリンクが落ちてきたので、ズ・ドン・タ・ター・(ウン)だ。ことごとくこのリズムをねじ込んでくる。しつこい。今日は、かつてないほどしつこい。ドバイ恐るべしっ！

疲れている時にここで夕波がくると、僕は余計に疲れることが多い。嫌な予感がピキピキする。当たり前のように僕の左隣にくると、夕波は購入したばかりのエナジードリンクを開けた。

プシュ

エナジードリンク独特の匂いが立ち込める。嫌いでもない匂いだ。この液体が疲れ切った夕波を再び奮い立たせるんだな。僕はふと思い出した。ポケットにとっておいたサイコロ。

「そういえば、コレ。朝。建屋の前で落としてたよ」

飲み物を置いていたテーブルの上にサイコロを転がした。六の目が出た。また六か。なかなかの確率の道のりを通り抜けてきている。三十六分の一だ。

「やるじゃん」

朝にこれを渡すために呼び掛けて、睨まれて以来の言葉が夕波から出てきた。物凄い称賛の言葉だ。

「別に狙ってないし」

「狙ったことにすればいいじゃん。もったいない」

は？なんだ。その六の至上主義みたいな。と、思っていると、夕波はサイコロを手に取りった。

「私は狙います」

と宣言すると、サイコロを振った。もの凄い勢いの回転を掛けている。これならイカサマ無しだ。そして、サイコロはピタリと止まった。六だ。六の目が出た。えっと。二百十六分の一か。

「凄いでしょ。もう一回出たら。凄くない？」

「そうだな。流石にもう一回出たら凄いな」

と僕の声を聞くと、夕波は、サイコロを自分のポケットにサッっとしまった。えっ。ここは

もう一回振るところでしょ。すると夕波は僕の心の声に応えるように言う。
「これ以上やったら、確率の世界を無視することになる。世界の終わり。嫌でしょ。終わったら。こんなことで。終わらせたら」
何言ってんだ夕波。
世界は終わらないだろ。まだ現実的な確率だよ。天文学的な勢いではない。まだまだゆとりあるよ。全然いける。また訳の分からないことを言うんだな。
「昨日のサイコロ振りも含めると連続で五回出た状態なんだよ。今」
え？マジでか。そういう背景があったのか。夕波は落とした時も六だったのは知らないからな。
「この土日ずっとやってたの。六連続で六に挑戦してたの。そして、わたしは今。達成しました」
六を六回連続！四万六千六百五十六分の一！それは凄い。落としたのと、僕が振ったのを入れたら百六十万分の一とかまで来てる。あと一回出せば宝くじ当たるレベルまで来てる。凄いよ。僕はそれを見てみたくなった。
「夕波。サイコロ投げてみ？」
しばらくの静寂がリフレッシュゾーンを取り囲む。そして、夕波はおもむろにポケットからサイコロを取り出した。そして次の瞬間、開けてあった、リフレッシュゾーンの窓に向かってサイコロを投げた。何！僕はテーブルの下のフットレストを使って、テーブル面の上に駆け上

がり、窓の外に身を乗り出した。ここは六階。白い物体が草むらに落ちていくのがわかっただけだった。夕波がポツリと言う。

「めっちゃ投げた」

「そうじゃないだろ！」

何故か僕は、声を荒げてしまった。それほど見たかった。

「投げろって言うから投げた。凄いプレッシャーだね」

そうか、ポーカーフェイスだったけど、実は緊張していたんだな。何千とチャレンジしてきて今があるんだな。土日ずっとだもんな。リフレッシュゾーンにいた全ての人が、こちらを見ていた。かるく僕は周囲に会釈すると、リフレッシュゾーンにいつもの空気が流れ始めた。なんでサイコロを会社に持ってきていたかも、この時、全てがわかっていたことに気づいた。

夕波。土日。暇だったんだな。

ハンバーグ島

夕刻。帰宅時間だ。今日も一日の仕事を終えて帰路につく。帰りは流石に夕波とは一緒ではない。それぞれが仕事のケリがついたところで帰る。待っている必要もないし、待っていたらいつになるかも分からない。たまに一緒にはなるけど。

そういえば今日は6月6日だな。合わせてきたか？夕波。まさかな。6階からサイコロを放り投げるなんて、なかなかの一日だった。

会社を出て少し歩いたところにバス停はある。残業無しで帰れば、バスはあるが、残業をするとバスは無いので歩いて帰ることになる。この時間だとバスはある。僕はバス停でバスをまっていた。一時間に一本しかないので、それに合わせて会社を出てきた感じはある。リフレッシュゾーンで少し時間を潰してきた。バス停には普段は僕一人しか居ないが今日は猫が一匹。微動だにしない。僕は犬や猫といった類いの生き物が苦手だ。小さいときに、近所の兄ちゃんが犬を飼っていて、大丈夫だから抱いてみ。みたいな風に言われて、リードから離れた犬は僕の方にステップを踏みながら走り込んで来て、抱き上げようと手を広げたら、犬がジャンプして、ドロップキックを御見舞いされて、後ろにあった鉄棒に頭を打って血だらけになったトラウマがある。少なくとも僕は犬で一度、死にかけている。あの犬は三沢光三選手といい勝負をした

に違いない。僕を病院送りにした相手だ。その後の記憶はない。
猫は僕と視線を合わせるでもなく、じっとしている。僕に危害を加える様子も無いし、あまり気にはならない。首輪はしてある。実に特徴のあるトラ柄の首輪だ。オマエも帰るところあるんだな。ご主人様が心配してるんじゃないのか。と、思ったところで、言葉が通じるわけもなく。時間は流れていく。夕波がいなければ、いたって普通に満ち溢れた世界が広がる。猫がいきなりしゃべりかけてきたりはしないし、ジャンピングニーをすることもない。三沢選手の大技は出て来たりもしない。案ずることも無い。猫は目の前でうつらうつらしているだけだ。眠いのかな？ちょっとかわいい気さえしてくる。いたって普通だ。無意味にゴロゴロ回り続けたり、目を白目にしたりもしない。ここで猫の動画をとってＳＮＳにアップロードしても、バズらない感じ。助かる。そうこうしているとバズじゃなくて、バスが来た。
　そこには目を疑う光景があった。夕波がバスに乗っているのが窓越しに分かった。僕に気づいた夕波は軽く手を振る。停車したバスの扉が開いて、僕は夕波の座っている横の空席に腰かけた。なんで？と僕の聞きたそうな顔を察してか？夕波が自分から口を開いた。
「暇だから、乗ってみた。反対側から乗って、終点に行って、折り返して来た」
　なるほど、それなら合点は行くが、反対側方面のバスに乗ることもなかろうに、お金もかかるし、ややこしさ万歳だ。また、この空間で一手差し込んでくる気配だ。萱島駅にも行ったのかな。萱島駅は寝屋川の真上にある空中の駅で、ふもとには萱島神社がある。神社にある御神

木が駅のど真ん中を貫いた変わった駅だ。萱島駅は島式のプラットフォームが二つで構成されている。真ん中の2線は上り下りの特急や急行が通過したり、準急が発着するのに使われる。そして、駅の3番・4番プラットフォームに穴が開いており、そこから御神木が貫かれていて、更には、プラットフォームの屋根に開けられた開口部も使って、御神木が天井へ突き破る格好だ。極稀に大阪ローカルのテレビなんかでも珍しい駅として、取り上げられる。萱島駅。時間にゆとりがあったら行ってみたい駅ではあるな。萱島駅を通過するときや、萱島駅に電車が止まった時には、御神木の中腹の一部を見ることが出来るが、全部は見たことが無い。萱島駅も淀駅と似ていて、車両基地が隣にあるだけで、特にこれといった観光地が無い。つまり用事がない。淀駅には競馬場があるが、それってどうなんだろう?あれだけの人が土日に使うのに、特にコレといった商業施設も無く、なんか勿体ない。もうちょっと集客力を使って、駅周辺を賑わせても良さそうなものだけどな。萱島駅も、御神木という武器を上手く利用していない点では、淀駅と似ている。御神木と競馬場。比べるモノでも無いか。京阪電鉄グループの都市開発に期待するべきか?否か?夕波がわざわざ、萱島駅にも寄ったという事は御神木を見ておこうという観光的なものなのか?

「萱島駅の御神木見たの?」

「見てないよ」

あ、そうなんだ。ほんとにバスに乗ってただけなんだな。スマートフォンで音楽を聴いてい

る様子も無い。あれだけ熱心にドバイの音楽に嵌っていたのに、あの熱はどこにいった。そんなに早々に冷めるもんか。あの情熱。自動販売機のボタンでもズ・ター・タ・ター・(ウン)をやっていたのは、記憶に新しい。

夕波が立て続けに話しかけてくる。

「寝屋川市駅で一緒にご飯食べない?」

「お。おー。いいね。食べよう」

訳は分からないことが多いが、夕波が嫌いなわけではない。どちらかというと美人だし、スタイルも実はいい。服のセンスとかもいい。こんだけ褒めるんだったら、普通付き合うだろうと思うかもしれないが、そうは思わないんだな。不思議なもんで、何かが欠けているんだろうね。

「君くんは何食べたい?」

「そーだな。大利商店街の中の喫茶店でナポリタンを食べたいかな」

「あー。あったね。喫茶店。よさそうね」

この流れだと、もう決まりだな。

「私は、ロータリの交差点を渡ったところにあるラーメン屋さんでラーメンかな」

あれ?食べたいのあるんか、じゃ聞いてくるなよ。

「じゃ、別々で食べようか」

秒で、夕波の口から複雑な提案が返ってきた。

なんでそうなるんだよ。一緒に食べようって言ったのをひっくり返すのか。通常の感覚とはほど遠いところに夕波は鎮座している。

「いや、一緒にナポリタン食べようよ」

僕は男らしく強引に出てみた。

「え？わたしはラーメン食べたいのだけど」

「ナポリタンも麺類だし、悪くないだろ？でも、そこまで言うならしょうがない。二人でラーメンにしようか」

「それじゃあ。ナポリタンが食べれないのだけど」

だめだ、堂々巡りだ。どっちかっていうと自分は家に帰って食べようと思っていた口だったが、ナポリタンと口にしたときからナポリタンだ。夕波は一歩も引かないのか？最初は僕に決定権あるような感じの聞き方だったのに。しかも、夕波は、よさそうとも言っていた記憶がある。

「じゃ。僕は一人でナポリタン行くよ」

もう意地だな。

「一人で行くの？ナポリタンにかける思い尋常じゃない事になってるね。なんていうの？命に替えてナポリタンっていう勢い。じゃあ、私も喫茶店に行く！一人では行かせらんない！」

さっきまで、別々と言っていたのに今度は、一人で行くのは駄目に変わっている。僕が主体的に決定したモノは、ダメな感じの冗談だったのだろう。ややこしい。

結局。夕波が折れた。意味が分からない。なんだったんだこのやり取り。なんだか僕が大人げないみたいな歯切れの悪さを感じる。命懸けでナポリタンを食べるわけではないが、命を懸けたみたいな言われよう。僕は命を差し出してナポリタンを食べるのか？何のための食事だそれ。毎日の食事にいちいち命を懸けていたら、命が幾つあっても足りない。そんな思考で生き死にが世界中にあったなら、あっという間に人口は減り、人間は絶滅しかねない。そうこう考えているとバスが寝屋川市駅のロータリーに着いた。ロータリーにあるドーナツ屋さんとチキン屋さんを見た夕波は言う。

「チキンもドーナツもいいね」

なんでもいいんじゃないのか、夕波は。ラーメンもさっと引き下がったし。さっきから意見に軸がない。ブレブレだ。地球の自転を夕波に任せたら、毎日、冬と夏が交互にやってきそうだ。地軸がブレるとはそういうことだ。

寝屋川市駅のバス停は僕らの乗ったバスの終着駅だ。全員が下りて静寂を取り戻したバスは室内灯が消され待機場に戻っていった。

僕らは駅のアンダーパスを通って、大利（おおとし）商店街の方へと歩き出した。駅を出ると、こちらにもバスのロータリーがある。駅の両側にバスロータリーがある構造だ。今僕らがいる側の方がロータリーの規模は小さい。そして、寝屋川という駅や地名と同じくをした寝屋川という川が流れていて、橋を渡った先に大利商店街がある。喫茶店は二百メートルほどある

商店街の真ん中あたりにある。知る人ぞ知るという感じの店だ。ちょうど商店街の入り口に差し掛かったところで、夕波が言う。

「何にしようかな。ナポリタンもいいけど、ガチッとしたものも食べたいなぁ」

なんだ？そのガチッとしたものって？ガッツリとかいう表現なら聞いたことはある。夕波もこの喫茶店には何度か来たことがあるみたいだ。そういえば、夕波とは一度も一緒に来たことはないな。

「グラム数が選べるハンバーグがあったような気がする。二百五十グラムのハンバーグにご飯とサラダとみそ汁。うんうん。いいかもね。なんかいい響き」

夕波よ。それは、どういう尺度での選択だ？いい響きって。まぁいいか、響きで選択というそういうこともあるか。砂糖・塩・胡椒みたいな感じかな。順番を入れ替えたら気持ち悪いもんな。何にしても夕波のメニューは決まったみたいだ。普通はメニューを見てから決めるんだろうけど。実に潔い。しかもグラム数まで決めてくるあたりはナカナカの記憶力だ。こういうところが僕は夕波に敵わない。認めざるを得ない。ただの可笑しな人間という訳ではない所が悔しい。こういう人に劣ると感じる自分がどこかでコンプレックスを抱かせる。人間に優劣をつけるのは、あまり好きではないが、自分の劣る事を自分で言うのだから、誰に害を与えるわけでも無い。このくらいの表現はあっていいだろう。

「じゃあ。僕はナポリタンにピザトーストを付けようかな」

どこで、勝とうとしているんだ僕は。なかなかのボリュームのメニューに対抗するかのように一品を付け加えた。

「えー。ずるいー。それは抜け駆けだね。抜け抜け」

夕波が反射的に発した言葉に、おののく。抜け抜けっていう付け足しも意味は分からないが、ずるいってどういうことだ。なら、ハンバーグにご飯とサラダとみそ汁が付く方がもっとずるいだろ。

「わかった。わかった。ピザトーストはシェアしよっか。僕のおごりだね」

「えっ？ほんとに？」

夕波の目がキラキラ輝いていた。夕波は二百五十グラムの巨大ハンバーグだけでは満足できないのかだろうか。

「ハンバーグは分けないよ」

僕の恩を仇で返す如く、釘を刺して来た。

「いいよ」

僕は、それほど食い意地はない。「いいよ」に嘘は無い。

「ほんとに？」

よっぽど大事だったんだな。本気でとられる心配をしてたんだな。ハンバーグか。完全なる防衛体制だ。ちょっとでも近づこうものなら航空自衛隊がスクランブル発進する勢いだ。ミサ

イル迎撃システムにイージス艦。ハンバーグ島の平和と秩序が保たれている。僕はハンバーグの一切を放棄する平和条約にサインをしたという所か。平和とはこういうことなんだろうか。実際の国際情勢はハンバーグ島のように一筋縄ではいかないらしい。

「食後は、やっぱコーヒーかな」

夕波は、まだ夕食のイメージトレーニングをしているようだ。

「コーヒーかオレンジペコか」

夕波がぼそっと言った。なんだかよくわからない二択になっているらしい。オレンジペコ？そういうメニューがあるのか？僕はその辺には疎い。

「コーヒーかオレンジペコか」

繰り返し繰り返し、この二択を呟いている。

「オレンジペコって何？」

僕は夕波に問いかけた

「オレンジペコはオレンジペコだよ」

僕は聞かなければ良かったと思った。オレンジペコは一般常識らしい。オレンジジュースのなんか違うやつか？まぁいい。店に着けば分かる事だ。

「コーヒーかオレンジペコか」

まだ言っている。オレンジペコが何か分からないから、アドバイスも出来ない。何が決め手

なのかも分からない。こういうのに上手くアドバイスできる食通ってのは凄いな。少しは見習いたいものだ。何食べても同じように美味しいと言っている僕には難しい。

「コーヒーかオレンジペコか」

これを最後に僕らの会話は終わっていた。夕波は人差し指を立てて、左に右にと動かしながら、二択の世界を行ったり来たりしている様だ。しばらく歩くと喫茶店の軒が見えてきた。もう少し近づいて、そこで僕らは驚くべき事実を知った。

なんか店の中が暗い。

「あれっ？閉まってんの？」

僕は咄嗟に声にしていた。十八時過ぎの夕刻時だったが、店は閉まっているようだった。中に人影もない。営業時間は十七時までという表示に気が付く。マジか。営業時間外か。年中無休とは知っていたが、営業時間は把握していなかった。

夕波も事の次第を理解したようだった。

「調べないで来てたの？」

夕波がそういうのも無理はない。

「悪い」

僕があれだけ推したナポリタンがまさかこんな結果になるとは、気まずい。

「そうだ、ラーメン屋行こうか」

僕は夕波に、さっきまでの自分の意思を翻す提案した。
「いや、ラーメン食べたくないし、もう帰ろ」
ありゃ、ラーメンの熱は完全に冷めてたか。凄い勢いで冷めるもんだな。取り返せない状態になっているらしい。つうか、ラーメンは本当は食べたくなくて、冗談のためだけに出てきたものなのかも知れない。弱いキーワードには、効力がない。やっぱりハンバーグ食べないと駄目かな。それにしても、この店って昼に来ないといけないんだな。知らなかった。今日のところは帰るか。夕波の落胆ぶりは、僕にもビンビンと伝わってくる。一生懸命守っていたハンバーグ島が天変地異で地盤沈下が起きて沈んだようなものだ。自然災害にはイージス艦をもってしても敵わない。
僕らは、また寝屋川市駅に戻るように歩き出した。
「淀駅についたら気分も変わるよ。淀駅でなんか食べよっか」
「うーん」
完全に沈んだハンバーグ島の周りを巡視艇で航行している。そんな気分だった。「艦長。ハンバーグ島は完全に沈んだ模様です！」「あいあいさー」みたいな？
二人、言葉数も少なく、歩いていく。
夕波はちょいちょい独り言を言っていた。
「コーヒーかオレンジペコか、かぁ」

よく聞くとさっきの言葉だった。夕波。その選択はもう終わったんだよ。実際は、選択ではなくて、この響きに憑りつかれているだけなんだと思う。

「コーヒーかオレンジペコか、かぁ」

しばらくして、また、かすかに呟きが聞こえる。うん。そうだな。

「コーヒーかオレンジペコか、かぁ」

繰り返し繰り返し、聞こえてくる。

「コーヒーかオレンジペコか、かぁ」

僕は歩きながらオレンジペコについて、信号待ちの合間を使って、スマホで調べた。紅茶の種類のひとつらしい。この帰り道の付近のどこかで飲めるもんなのか？心当たりも無い。

「コーヒーかオレンジペコか、かぁ」

夕波の呟きは、駅まで止まることが無かった。

「コーヒーかオレンジペコか、かぁ」

夕波。たぶん、今日はオレンジペコは無理なんじゃないか。繰り返すこの言葉は、ひとつづつの抑揚が違っていて、音楽における繰り返しが絶妙にアレンジされている感じに似ていた。つうか、ここまで来たら、もう、オレンジペコの一択なんじゃないか？

物凄く珍しそうな飲み物だ。

「コーヒーかオレンジペコか、かぁ」

また昼に来ようか。夕波。

オナカスイタ

結局、夕波と僕は帰路についた。淀駅より寝屋川市駅の方がまだ、店の選択肢は多そうだが、既に改札を抜けて駅まで来てしまった以上、あとには戻れない。オレンジペコは無いにしても、ハンバーグくらいは、あるかもしれない。帰りの急行電車が来るまでには、まだ時間があるので、僕らは寝屋川市駅の待合いのベンチに腰かけていた。あれから、もう少しオレンジペコについて調べたのだけれど、どうやら紅茶の銘柄ではなく、紅茶の形式と茶葉の摘み取りの位置の分類みたいなものらしい。オレンジペコの条件として、フルリーフと呼ばれる一枚葉であること。つまり、お湯を注ぐと葉が広がって一枚の葉の形に戻ろうとするということだ。そして摘み取る葉の位置だが、先端から2番目あたりの葉だそうだ。先端の葉はティップと呼ばれていて、オレンジペコのような表現で言えば、フラワリー・オレンジ・ペコのような名前になり、さらにその種類は細分化され、なんちゃらフラワリー・オレンジ・ペコとなるそうだ。この全ては、文明の利器を用いて、今日、初めて知った知識だ。纏めているサイトの管理人様、お疲れ様です。僕はあなたのおかげでオレンジペコのなんたるかを知ることが出来ました。

　というわけで、オレンジペコはまた今度だな。そんな茶葉を提供している店を探すのは至難の業だ。大体は紅茶専門店で買うことで、確実にオレンジペコに辿り着けるそうだ。でも、喫

茶が提供してくれる方が、プロの淹れ方なのだから、更に美味しさを引き出せているに違いない。なんなら自分は飲んでみたい。普通の紅茶と違いが分かるほど、いい感じの味なのか？知りたい。絶対にまたチャレンジしよう。食後にオレンジペコだ。

お、18時台の淀駅止まりの急行電車が来た。

淀駅は基本的に急行は止まらない。だけど、車両基地がある為だと思うが、朝は出町柳方面への淀駅始発が6本程あって、その電車だけは、淀駅から乗って行ける特例措置がある。夜は淀駅の車両基地に戻ってくる電車があって、18時、19時台の3本が淀駅に止まるという特例措置がある。朝より夕方に帰ってくる急行電車の数が少ないのは、大阪の淀屋橋から京都の出町柳に戻ってくるときに急行から準急に肩書きを変えて戻ってくるからだ。車両基地への毎日の出入りする車両数はほぼ同じになっているはずだ。でなければ、どこかの車両基地で電車が溢れかえってしまう。そして、土日は京都競馬場へ行く人が増えるためだろうか、大阪方面から来る淀駅止まりが午前中に幾つかあって、夕方には大阪へ向かう淀駅始発が幾つかあるという感じだ。京都競馬場の力は絶大だ。淀駅の淀川との間には大規模な商業施設も観光地も無い。何にも無い淀駅に急行を止まらせてしまう力。凄い。少し前までは京都競馬場といえば、負け組ギャンブラーの巣窟でもあり、汚く荒れていて、暗い雰囲気だったが、昨今は幾分と綺麗になった。清潔なのは良いことだ。駅も綺麗に階層されて、より良くなった。駅の階層は競馬場とは関係がないと思うが、空中駅化するための工事だったのだと思う。踏切を極力無くし

ていこうとする京阪電車の取り組みは、好印象だ。もっと他の鉄道会社やＪＲも見習った方がいいとも思うが、各社の財務事情もそれぞれ異なる。難しい問題だ。僕は、淀駅止まりの急行が来るたびに、この長い一連のくだりを思い出す。毎回、進展の無い思いだ。僕がいくらそう思ったって踏切の増減に影響力はない。それを思えば京都競馬場の方が良い仕事をしているのかもしれない。ちなみに僕も競馬場には時々、足を運ぶ。あまり賭けないのだけれど、馬を見るのもナカナカ良いもので、動物園の馬専用版といえる馬園という役目を担っている。賭けた時はきっちり外れる印象だ。そういった類いの才能も無い。馬好きで賭けにも強いという事情通には少し尊敬する部分もある。

淀駅周辺に住んでいる人は、この競馬場の存在に一喜一憂しているのかも知れない。

いろいろ思いにふけっている間に、電車は走り出し、香里園駅に到着した。あれから、夕波とは、会話が途切れたままだ。いつもこんな感じだから、特に違和感も無い。不必要に会話をしたりする方では無い。どちらかと言えば省エネ派だ。結局、この省エネ分は、どこかでドバっと無駄遣いされることになると考えると、これくらいが丁度いい。

あー。そう言えば、朝に見た終活の女の子、この駅で降りたな。枚方駅で乗って、ちょっと間を座って、本を開いて、そして、すぐに降りた。この駅には私立の小中高一貫校がある。そこに通っている子かも知れないな。あまり制服の種類で学校名がわかるような能力は所持していない。香里園駅で、あの子が乗ってくる事は無かった。当たり前だけど。乗ってきたら大分

と奇跡だ。不思議なもので、毎日同じところを往復するもの同士が乗り合わせる電車というものだが、顔見知りになることは少ない。見たような顔かもと感じる人はいる。まったく同じ電車場所を選んで生きている人同士なら、きっと顔見知りくらいにはなるのかも知れない。

ここで突然、夕波が話しかけてきた。

「あの子、乗ってこないね」

「ああ、そうだな」

なかなかスキルの高い会話だ。同じことを考えていたんだな。あの子っていうのが誰なのか、すぐに分かってしまった。

「少し、気になるわ」

夕波が気にしているのは、終活を考えている小学生がいたということだ。確かに、何か事件に発展したら、あの時、僕らは何か食い止めることが出来たのではないか？そう思うだろう。でも、こういうナイーブな問題に足を突っ込む場合、昨今では余計なお世話になるという風潮もある。近所同士の付き合いが疎になる現代社会。ある種の社会問題でもある。

「確かに、気にはなるね」

僕は、しばらく間を置いて返事をした。さっきまで夜ご飯とオレンジペコで騒いでいたのが、嘘みたいな雰囲気だ。

でも、あの時、夕波は珍しいモノでも見たかのように微笑んでいた。面白さと、そのどこか

でひっかるモノの両方を感じていたのかもしれない。
電車は、香里園駅を出発していた。急行なので、この先はいくつかの駅を跳ばして電車は進んでいく。
「もし、また一緒になったら声でも、かけてあげようか？」
僕は、ガラにも無いことを言っていた。
「そうだね」
夕波は躊躇なく、返事をしてくれた。
また少しの間、僕らの間には静寂が流れた。
「アレ」
するとまた、朝と同じように一瞬、小さく指を差した。僕は視線を指の延長線上に向ける。その先には、男の人がいて、黒いスーツを着ている。背を向けているため、何を夕波は面白がっているのか分からない。特段、変わった様子はない。目を凝らして、黒いスーツの男性の姿を舐めるように見回す。間違い探しでもしている気分だ。僕はやっとで気が付いた。肘のところにご飯粒が付着していた。僕が夕波の方を見ると、夕波も僕の顔をみていて、僕がうなずくと、その反応をみて、少し笑みを浮かべて、また正面をみた。男性に指摘をして、ご飯粒をとってもらうように促すことも出来たが、そこまで重要な問題でもない。家に帰れば気が付くだろう。夕波もその気は無いようで、放置だ。

でも、よくあることのような気もする。些細なことで、満足そうにしている夕波は、いつもに比べてセンサーが鈍っているのかもしれない。ご飯を食べないと、その威力は小さくなっているのかもしれない。それと、あんまり人に指さすのはよくないぞ。夕波。

夕波にそのことを釘を刺しておこうと、僕が夕波の方をみると、今度は上を見上げていた。目は閉じている様だ。なんだその恰好は。よく見ると、朝に見かけた、スマートフォンを両手で握りしめている。なんだかメモ帳のようなアプリに何か文字が表示されているようだった。これは読めと言わんばかりの状況なので、覗き見た。そこには、「オナカスイタ」とカタカナで書かれていた。なっ！なんだその、心の叫びを文字に起こすやり口。僕の反対側に座っている人にも夕波の感情が、まるわかりだ。

何気に、夕波も他人から指さされてもおかしくない状況。でも、こっちを見ろという素振りもなかったので、見なかったことにした。夕波はそのまま眠ってしまうんじゃないだろうか、変な恰好だ。そうして、夕波は淀駅まで微動だにしなかった。

「夕波、着いたぞ」

夕波は寝ていたようだった。ぱっと目を見開くと、慌てて立ち上がり、座っていた席を確認して、電車を降りようとした。寝ぼけていても、忘れ物がないか確認するところは、抜け目が無く、しっかりしている。忘れ物をしたら、メンドクサイことが山盛りになるのは僕も良く知っている。一度、スマートフォンを忘れたことがある。あの時は大変だった。

三重県へ遊びにいったときのことだ。近鉄電車の特急を使って四日市のホテルまでの移動だったが、四日市の手前の津駅でアーバンライナーの特急から通常の特急に乗り換えるときに、パンツの左ポケットに入れていたスマートフォンがするりと抜け落ちて、シートの背もたれと、座席の平らな部分との隙間に挟まったのを、気付かずに置き忘れた感じだ。津駅を出発したアーバンライナーは次は終着の名古屋駅まで止まらない。つまりスマートフォンは名古屋駅まで直行した訳だ。乗り換えの僕は、乗り換える特急の座席番頭は覚えていたが、間違いがあってはならないと再確認をしようと思って、ポケットをまさぐった時に、全てを察した。特急券はスマートフォンで予約したので、チケットレスなため、無くても特急には乗れると思ったので、とりあえず、四日市までの特急には乗った。そして、四日市駅で駅員室を訪ね、スマートフォンを落とした旨を伝えた。すると、アーバンライナーの自分の座席番号にスマートフォンの落し物が無いかを確認してくれる手筈になった。その間に駅員さんに教えてもらった電話会社のお客様センターの電話番号に連絡し、電話の一切の機能を停止してもらった。公衆電話でフリーダイヤルにかけるときでも十円玉が必要だが百円玉しかなかったので、思い切って百円を入れた。すると電話をかけ終わったときに百円が返ってきた。そういう仕組みなのか。と感慨深く思ったのもつかの間、しばらくの時間がたったので、再び駅員室を訪ねた。するとスマートフォンはありましたとの吉報。これから四日市駅にデリバリーしてくれると言う。今の時間で出発した名古屋発の特急が四日市に到着次第受け取れるみたいな感じだった。本当にお

騒がせな奴だった。でも、近鉄の駅務員の皆さんの手厚い対応には、感謝しても感謝しきれない。そんなことを振り返りながら駅のコンコースを歩き、駅の外へと出た。

「じゃ、洋食屋でも行くか。夕波」

「いいね。」

夕波は二つ返事だった。僕は、淀駅の洋食屋を知っている。しかも、今日、今の時間であっても、ほぼ確実に営業しているであろう店だ。

でも、夕波の手元に握られたスマートフォンは、点灯していて、「オナカスイタ」と表示されたままだった。

もういいんじゃないか？そのメッセージ。夕波。

暫定

淀駅を京都競馬場とは、反対側に出ると、バスロータリーがあり、駅の沿線沿いの道を大阪方面に歩き、細い路地を右に入って、しばらく歩いて、次は左に曲がると、すぐのところに洋食屋がある。洋食屋さんの基本とも思えるハンバーグ定食も、健在だ。

よし、店は開いているようだ。僕らは店に入った。こじんまりしているが、こういう雰囲気の店にハズレは少ない。この店にはカウンター席しかないので、カウンター席に腰かけた。僕の左に夕波は座った。この店には何回か来ているが、僕としては、かなり美味しいと感じる店だ。ジョッキーのもとの思しきサインが沢山張り出されている。愛されている店だ。僕はなんでも美味しいと感じる味音痴ではあるが、おおむね間違っていないはずだ。ここにはスパゲッティもあるが、僕は夕波に合わせることにした。夕波はもちろんハンバーグで決まっているだろう。

「すみません。注文いいですか？」

僕は、店主によびかけた。

「どうぞ」

「じゃあ、このハンバーグ定食を二つ」

すると夕波が間髪いれずに言う。
「ハンバーグ定食は一つやめて、ビーフステーキとライスで」
はぁ？ハンバーグ島どうなった？沈んだからといって、完全に放棄するのか？盛土してでもここはハンバーグ島を死守するところだろ。
「あれ？スパゲッティじゃないの？」
夕波は僕に問いかけてきた。いやいや。それはこっちのセリフだろ。しかもメニューも見ずに切り替えてきた。
「いや、僕もハンバーグ定食にしようかなって」
すると夕波は
「いや、私はステーキ定食だから」
なんだ、この展開。自分のことは棚にあげた感じ。そうか、夕波からしたら、ハンバーグを分けないってだけで、あまり拘りはなかったのか、その点、僕はナポリタンをめちゃめちゃ推していた。確かに。でも、夕波に合わせたつもりだった。なんか、尺に触るような、触らないような。
「勝手に人の注文を決めるのは、どうなのかな。そういうとこ直した方がよいかもね」
夕波は畳みかける。なるほど、気を付けた方がよかったな。こういうのなんて言うんだっけ。んー。そうだ。女心と秋の空！いや、今はこれから夏！

「そうだな。ご忠告有難うございます」
と言いながら、僕はテーブルに両手を着き、テーブルと平行になるくらいまで頭を下げた。ちょっとグググってなった感じはあったかもしれない。
「よろしい、暫定的に許そう」
なんだよ。その暫定的に許すっていう単語。これからもちゃんとやれるか確認したり、検定したり、審査したりして、暫定がとれるのか？注文ひとつの行為の是正措置への道は険しい。まるで、ＩＳＯなんちゃらの審査のごとく道のりが険しい。正式に許されるのは、いつだ？夕波は注文しただけの段階で満足そうで、少し笑みがこぼれているようにも感じた。水を飲む耽美にプハーとコップを少し左上に突き出す。３回目かコレ？僕は何も突っ込むことも無く静観していた。それビールとかでやる奴だから。
それにしても、ラーメンからのチキン・ドーナツでハンバーグそれでビーフステーキ。着実に進化を遂げてきた。高みを目指す夕波の献立。結局、二千円越えのところまで来た。あと何回か店がしまってたら、高級料亭くらいまで行っていたのかもしれない。僕のハンバーグ定食の倍くらいの価値だからな。ソレ。
あ、そういえば、ビールは置いてるんだったなこの店。夕波、ビール頼めば良かったのに。そのプハーっていう奴に合うと思うんだけど。と考えている傍からプハーと言っている。水が無くなったようだ。店員さんもそのことに気が付いて、すぐに水を淹れに来る。速い。出来た

店員さんだ。カウンター席の全ては目の届く範囲だからな。どこから攻め込まれても、すぐに打ち返す感じだ。パーフェクトゲーム。

目の前で僕らの注文内容が作られていく。見ていて楽しい。先に二人が入店していて、二人とも、食事に入っている。僕らの分で間違いない。

異なる注文であったが、二つが同時に調理されていて、僕らに提供されたのも同時だった。はぁ。そういえば僕もオナカスイタだったな。

「いただきます」

手を合わせ、神妙なおももちで夕波は言葉を発するとナイフとフォークを手に取った。お肉をヒトカケラ分に切って。ソースによく肉を絡ませると、フォークで白ご飯を救って、肉の上に乗っけると、フォークで上手く肉を救うと、上に乗った白ご飯がこぼれないように、口へ運ぶ。器用なもんだ。いや、なんだその食べ方。すると夕波は

「あー美味しい」

と呟いた。次は話しかけて来る。

「肉の良さが引き出されてるね。肉の旨味を凄く感じるし、脂身も多すぎず、さっぱりしていて、それでいて、ソースがほどよい醤油の風味で醤油をサポートしている野菜達も液状化されることによって紡ぎ出される丁寧な仕事。全ての味が絶妙に脳に刺激して来る。ご飯とも合うし、美味しいわ」

何。その、テレビの食レポを上回る感じ。テレビじゃないのが引くわ。それだけの賛辞なら、牛を育てた牧場主も野菜を栽培した農家の人も醤油の醸造主もお米を育てた農家の人も、これを作った店主も皆が喜ぶわ。聞かせてあげたい。店主の人は使ったフライパンの後処理をしているようだった。この声は届いていないのかも知れない。

「今日は、これを食べよっていう。神様的な存在からのお告げだったのかもね」

僕は、今日あった、これまでのことを良しとする発言をした。

「いや、これで帳消しになるモノでは、無いと思うよ。店の営業時間は調べるべきだわ。私は今日の事、忘れないから」

なんだ、その墓場まで持っていきそうな恨み節は。

「そうだな」

僕は自分のハンバーグの方を手に付けることにした。ステーキもそうだけど、このお店はお皿で提供される形式で気取らないところがいい。鉄板でいつまでも保温してないど、さくっと食べろってことなのかも知れない。いつまでも熱々よりは食べやすいという視点もあるだろう。それにしても、夕波が死守しようとした。ハンバーグ島。まさか自分に回ってくるとは。領土返還うんぬんの感じだな。素晴らしい。返還されたハンバーグにナイフを入れると肉汁がじゅわーっと流れ出た。旨そう。僕は切り取ったハンバーグのヒトカケラを口にほおばる。旨いっ！これで千円もしないコストパフォーマンス。相変わらずのクォリティ。御見それいたし

ます。隠れた名店かもしれないな。この店がテレビで取り上げられたような形跡もない。これだけサイン色紙があったら、取り上げられても良さそうなものだけど。

ふと、横をみると夕波が、咀嚼しながら、ボクシングの練習で相手のパンチをよけるような動きをしている。両手にはフォークとナイフだ。

「何やってんの？」

この緊急事態を速やかに収めるべく、声をかけた。

「この美味しさ、逃れられないね」

何を言ってるんだ？食べたら、そりゃ逃れられないだろ。おいしさのパンチが無数にやってきて、やられまくっている夕波の姿が僕には見える。倒れ込まないか心配なくらいだ。一発くらいよけないと、もう一口には行けないぞ。どうなるんだコレ。

この行動は料理人のマスターも、あっけにとられて目が点になっているようだった。

「いや、大丈夫ですから」

僕は、夕波の両肩を微かに触れるようにして、マスターを落ち着けた。マスターは、この光景を見て呟いていた。

「こんだけ喜んで貰えれば、作り甲斐もあるってもんだな。自由にさせてやんな」

いやいや。自由にさせたら不味いだろコレ。美味しさと戦ってるんだろコレ。夕波は次の瞬間ピタリと動作をやめて、次の一口に向かっていた。夕波のさじ加減でいくらでもパンチは止

めれるらしい。そりゃそうだ。あれだな。んー美味しいって言って両手をくるくる頬っぺたのあたりで動かす奴。あれの進化版と思えばいいのかな。そんなに美味しんだなソレ。僕も一口欲しくなっていたけど、ハンバーグ島の下りもあるから、ステーキ島も同じく、防御は堅いだろう。堅守だ。サッカーでいうところのカテナッチオだ。堅守速攻。すると夕波はまた、言葉を発した。

「今年度、暫定1位だね」

？

それは美味しさのランクかなんかか？今年度ってまだ2カ月くらいしかたってないけど。まぁ暫定1位なんだろう。それって、マスターに聞かせるほどの事か？

その後も、夕波は時折、ステーキオンザライスしながら、嬉しそうに食べて行く。僕は、夕波ほど、食事というものをキチンと楽しんでいるだろうか？こうやって一食一食を楽しんでこそ人生だ。何を食べる時も全力で考え、全力で楽しむ。食を支えてくれている全てのモノに失礼の無いようにしなければならない。僕は夕波のそうした行動を見ただけで、そこまで悟りを開いていた。

ひょっとして、夕波。暫定1位を毎日のように更新してるんじゃ？

そんなことないよな。夕波。

夕波亜津子の深呼吸

あれから、夕波はハンバーグ島を飛び越えて、ステーキ大陸を制覇して、僕のハンバーグ島をちょい荒らしーのして、満足そうに食後の余韻に浸っていた。夕波は少し上を見て、目を閉じている。僕の方が食べるのが遅かったので、何かを瞑想しているようだ。待つとは暇なもんだ。なんだか申し訳ない。僕も食べ終わったし、僕自身も余韻に浸り終わったところだ。

「夕波。そろそろ行くか？」

「えっ？ちょっと待って、もう少し」

「えっ？何がもう少し？」

「今、半分まで来てるの。あと半分、お肉残ってるから」

と、右手の親指と人差し指でナイフを握ったまま、僕の目の前に掌を突き出した。

「！」

まじか、コイツ。余韻のフリして、最初から食をリピートしてるのか。それでまだ、ナイフとフォークを握って、エアギター的なエアイートをしてるのか。イートは、英語で食べるっていう意味ね。人の2倍も食事を楽しむことをいとも簡単にやってのける夕波。この子、恐ろしいわ。まじで恐ろしいわ。

「いいよ。ゆっくりやって」

僕は夕波のエアイートを待つことにした。さっきまで待たせていたのだから、立場が逆転しただけだ。なんてことはない。待てよ。夕波は一瞬も待っていないんじゃないのか？オレだけか。待っているのは。なんとなく深く考えると、自分だけが損をしているような気さえしてくる。深く考えるな！感じろ！いやいやいやオカシイだろコレ。何を待ってるんだオレ。エアイート待ち？そんなの初めてだよ。いやいやいや、割かし一緒に過ごして来たけど、コレは今までに無かった展開だよ。エアイート待ち！麻雀なら、一生アガれない奴だコレ。エアイート待ち。まぁ先ず誰もフラないねコレ。エアイート待ち。本物を食べたすぐ後のエアイート。おなかすいてないのにエアイート。

それから5分くらいたったが、進展を見せない。小刻みに咀嚼しているようなしていないような。どうなってんだろ今。言葉もかけづらい。食事の邪魔をするようで、いやエアイートの邪魔をするようで、が正確か。すると突如、夕波がが両手の掌を合わせた。そして1秒くらいの間をおいて、目を開けた。

ひょっとして、終わったかコレ。

夕波は、おもむろに水をコクリと飲んだ。そういえば、エアイート中は一度も水を飲んで無かったな。エアイート中はエアドリンクもしていたのかも知れない。水を飲んだ夕波は、何も言葉にすることなく、立ち上がった。店の店主も何も言葉にすることなく勘定を行うべく近く

に寄って行く。夕波は丁度の金額をぱっと支払い店を出ていく。僕は、えっと、いくらだっけか、あ、ちょうどは無理かと千円を支払うと秒で、おつりが返ってきた。「ありがとうございました」という店主の声が響く。外に出た夕波にも聞こえる勢いだ。二人分が一つになってるんだな。夕波らしき人影は、こちらに向かって会釈しているようにも見えた。僕は御馳走様でしたと口にしながら、店の外へ出た。僕が店の扉をあけると、外にいたはずの夕波が店の中に顔を覗き込んだ。

「御馳走様でした」

忘れていたかのように挨拶をした。

「はい、ありがとうね」

店主も応える。夕波は挨拶を忘れていた感があったのかもしれない。だが、僕が出ていきながら挨拶したのに対して、夕波はわざわざ店に戻って来てからの挨拶なので、どちらかというと夕波の方が礼儀正しくも感じる。また、ちょっと損したかオレ。いい人ポイントがグッと下がったのを感じた。好感度は結構、気にする方だ。でも、もう店の外だし、やり直しは効かない。時すでに遅し。

夕波と僕は、外の風の気持ちよさを感じていた。ご飯を食べたあと独特の、カラダの中の熱が外の風を気持ちよく感じさせる。

「あぁ気持ちいい風」

夕波が感情をこぼす。なんとなく、僕の感じている事に近いことを夕波は言葉にしてくれる。こういう感じは幾度となくあった気がする。

「ご飯食べた後にはちょうどいい風だな。気持ちいい」

「この風はいつでも気持ち良いよ」

夕波は僕の言葉に突飛な言葉を返した。

「え？そうかな？」

「そうだよ」

確信めいた答えもなく、歩き出した。僕らは、このだいぶ先で、帰る方向が分かれる。前もって確認しておく必要がある。

「じゃあ、帰るか」

「じゃあ、帰ろうか」

意見は一致した。これ以上は一緒にどこかへ行く必要もない。このまま川へ向かって歩くと県道１３号線が横たわっていて、そこで左右に分かれる。夕波が左で、僕は右だ。淀駅に面している川なので淀川だと思われがちだが、この少し手前の大阪側で淀川は終わっていて３つの水流に分かれている。今、ここで言っている川は桂川だ。南に向かえば、宇治川、もっと南には木津川だ。ここから木津川となる歩いていくのは困難なほど遠い。それくらい手前から分流している。淀駅の淀とは一体なんなのかと問いたくなる所だ。淀川のない淀なんて淀とは言え

ないよね。というフレーズが僕のお気に入りだ。誰にも言ったことは無いけれど。

「ねぇ」

夕波は前を歩いていたが、ねぇという言葉で振り返り、僕との距離を確認すると前に向き直して、話し始める。

「淀川の無い淀駅なんて淀とは言えないよね」

え？同じことを思ってた？

「そうだな。なんでこんな、淀川じゃなくなるかも知れない微妙な位置に淀なんて名前を付けちゃったもんだな。昔の人は」

とっぴな質問だったけれど、僕がよく考えていたテーマだったので、即答できた。

「おー。そう来たか」

夕波は関心している様子だった。僕はこういう時、少し高みにたった気がする。

「昔は、少なくとも淀城のとこまでは淀川だったのかなぁ」

確かに、言われてみれば、淀城は昔にあったモノだ。淀川の淀と淀城の淀はきっと何かしらの繋がりがあるはずだ。夕波が続けて話す。

「豊臣秀吉は元々、淀城の南にあった川を今の北側にもっていったんだって、そうして出来上がったのが、桂川。あ、それくらいは知ってるか」

え、夕波、なんか詳し過ぎないか？豊臣？えらい昔まで遡ったな。

「いや、知らないよ」
僕は、正直なところを答えた。
「あー、そうなんだ。じゃあさぁ、巨椋池って昔はもっともっと大きかったの知ってる？」
地名に巨椋池というのが、この辺にあるが、池らしきものは無い。この感じだと、どこかに巨椋池は存在しているということだ。それさえ知らない。そして、夕波は、僕の知らない池が今よりもっと大きかったと言っている。知らない事が飛躍し過ぎていて、戸惑う。
「いや、知らなかったな。巨椋池自体が存在してるのも知らなかったよ」
「巨椋池っていう大きな池があったんだよ。この辺の一帯がそう。宇治の観月橋のあたりまで池だったんだよ」
夕波の情報のスケールの大きさに知らなかった自分が恥ずかしい。
「その巨椋池の名残が京都競馬場の真ん中にある池なんじゃないかって話もあるんだって」
「へぇ。じゃあ巨椋池は現存していないかも知れないってこと？」
「そうなるわね」
なるほど、巨椋池は現代に存在していないのかも知れないなら、僕が知らないのも、それほど恥ではないな。
「豊臣さんが、ねじ曲げた後、昭和の始めくらいに川の合流地点をかなり大阪側にするような付け替え工事をして、巨椋池は孤立化してしまったの。遊水地になったわけね。でも魚も取れ

ないし、湿地帯で虫が多くて、埋めてしまったらしいの。農地拡大もできるしね」

なんだ。夕波は、淀川が無いわけも知っていたってことか。流石だな。その上で、淀駅なんて淀とは言えないと、そういうことらしい。しかし、なぜ淀ではなく淀駅を名指しで非難するんだろう。淀城もある、この辺の一帯を非難しても良さそうなものだ。淀駅限定で、淀の名を軽く否定している。淀駅のお膝元は淀本町という地名にもなっている。淀駅が少し可哀想な気さえしてくる。夕波は続ける。

「諸悪の根源は豊臣ね」

何を言ってるんだ？川をねじ曲げたあたりから、様相を変化させているのは、最もだが、埋め立てたのは、昭和に入ってからだから、孤立させた河川工事の方が悪のような。豊臣秀吉が生きていたら、間違いなく切腹させられるなコイツ。呼び捨てにしてるし。豊臣さん！ここに謀反人がいます！と思っていると、謀反人は振り向き、掌を上にして、僕の目の前に差し出す。

「はい。情報提供料」

出た、この感じ。夕波は何かにつけて僕から小銭をむしり取ろうとする。飼い慣らされている僕は素直に百円玉を謀反人の掌に上納した。

「なんだ、百円か」

不服そうだ。百円もらえりゃ万々歳だろ。あれだけの情報で百円は、どっちかっていうと、ぼったくりだろ。

夕波は不服そうにしながらも百円玉をしっかりとポケットにしまった。冗談じゃないところが怖い。

「じゃあ、今夜はこれでぱぁっとやるか。ぱぁっと」

何言ってるんだこの人。百円でぱぁっとは出来ないよ。きょうび、ジュースを買うのも難しい。スーパーでレジに並んで買う必要がある。でも、自動販売機で買うジュースってのは、かなり贅沢なモンだ。広い店内でジュースを探し、レジに並ぶのが面倒なだけで、スーパーではなく自動販売機を使う人のなんと多いことか。むしろジュースだけを買う客の方が珍しい。僕は、ジュースだけをスーパーで買う方だ。細かいところで経済を回さない自分こそ謀反人なのかもしれない。んなわけないか。そうこうしていると広い道路に差し掛かった。ここへ左に曲ると僕らの住処へ向かう。しかし、夕波はぱっと右側、要するに反対に曲って歩き出した。

「あれ？反対じゃない？」

「へ？スーパーに寄って行こうと思って」

「買い出し？」

「ぱぁっとやるっていってんじゃん。ぱぁっとだよ」

「ぱぁっと？」

「ジュース買う」

「そっか」

「ぱぁっとするけど、一緒に行く？」
「うん」
僕はもうぱぁっとの意味を追いかけない事にした。基準は人それぞれだ。
やっぱ、スーパーでの買い物って時間かかるな。自動販売機。わからんでもない。夕波は、コーラ。僕はオレンジジュース。オレンジペコに引っ張られたのは僕だけだった。引っ張られたと言っても、明後日の方向だな。店を出ると、夕波はスグにコーラのキャップをねじり開けた。プシュっといい音がした。そういえば、洋食屋さんでは、水でぷはぁとか言っていたな。記憶にあたらしい。オレンジペコが沈んでからというもの、ジュースのような味のついたモノは久しいのかもしれない。夕波の気持ちの切り替え具合がどうもわからない。さっきまで紅茶のあたりで彷徨っていたのに、迷うことなくコーラだった。
僕らは再び家路につくことにした。僕と夕波が分かれる交差点までたどり着いた所で、背後から消防車がやってきた。京都競馬場の近くに消防署があるので、そこからの出動だろうか。久しぶりに、この近辺で消防車を見かける気がする。消防車独特の派手なサイレンは命の危険を感じさせる。周りを走っている車も、消防車に道を譲ようにしている。消防車は僕らの目の前の交差点が赤信号なのを無視して、突っ切っていった。その向こうには桂川を跨ぐ橋が架かっている。どうやら川の向こうで一大事が起きているらしい。夕波はこの光景を見て
「ちょっと、川岸まで行ってみようか？」

近所の一大事は、知っておく必要があると言う様子で、軽く向こう岸がどうなっているか確認しようと、そういうことだろう。

「そうだな」

僕も一緒に見に行くことにした。

信号機の色が変わり、前進を許可された僕らは桂川の堤防へ向かう道を小走りに進んでいく。川岸までは近い。百メートルくらいだ。夕波の方が小走りでも早い。体力でも負けているかもしれない。切実な問題だ。そして、河原へ続く目の前の階段を駆け上がる。運動不足だ。息がもたない。夕波の小走りに衰えはない。ペースをしっかりキープしている。距離と運動量を計算された絶妙なペースなのだろう。僕らは一番高いところまで上がってきた。

「あれ、なんにも見えないね」

「あ、ホントだ。はぁはぁ」

僕だけ息切れしている様だった。しかし、何も火事らしき炎や煙がないということは、まだ火の手は大きくないという事だ。消防車も向かっていったし、事なきを得そうな気配だ。けが人とかいなければいいのだが。しっかし夕波は息切れもせず。どういう身体の構造になっているんだろう。

「なんか、安心したわぁ。見に来てよかった」

夕波が呟いた。そうか、夕波は放っておくと不安だから、見たかったんだな。何も大きなこ

と　が起こっていなければ良いとそういうことらしい。世界中で日々、戦争・紛争・飢餓・医療不足・社会不安による殺人・虐待・事故やらなんだので命を落としている人はいるのかもしれない。だが目の前に起こっていることくらいは、悲しい結末を迎えて欲しくない。そんな気持ちは純粋なものだろう。日々、世界中で起こっていることを気に病んでいたら、生きてはいけない。僕らはそういう事象を心の奥に刻み込み、近くの世界から平和にして行くしかない。直接、遠隔地に出向く人もいるだろう。だが、日本の日常からも世界は救えることはある。そうでなければ僕らは報われない。私利私欲のために生きているようで、実は社会に貢献しているパターンもあるのかもしれないが、私利私欲はあまり好きではない。そんなことを、この何もおこっていない日常の灯りは思わせてくれる。どちらかというと桂川の向こう岸は派手な灯りは無い。平穏な空気が漂っている。水の流れが緩くなり、ここで淀んでいく桂川・淀川のように。今は既に存在しない巨椋池の淀みを吐き捨てて。

あ、巨椋池、無き今、淀の水は淀んですらいないのかもしれない。高知県の仁淀川の仁淀ブルーには程遠い、対角に位置する淀川。桂川・宇治川・木津川を含め残念な川だ。今日もあまりいい匂いはしない。淀みとは流れが遅くなったり、緩くなったりすることで、一度かき混ぜられることを意味しているが、汚くなるという意味ではない。淀川が淀むを汚い泥水のことのように認知させる一因になっているのではなかろうか。滋賀県・京都府・大阪府で生活用水が排出されてきた歴史が、この汚さを定着させている。今はだいぶ良くなったものの、まだまだ

仁淀ブルーの足元にも及ばない。
暫くの沈黙を保っていた僕らの間に、スゥーっという息を吸い上げるような音がした。
ふと、左に居た夕波を横に見ると両手を上に挙げていた。
？
そうすると、横にゆっくり手を広げて下すと、スゥーっという息を吐き出す音がした。次は手を横に広げてスゥーと息を吸い込み、手を閉じながらスゥーっと音がする。お世辞にも、空気が良いとは言えない、この場所で深呼吸をしている。
夕波亜津子の深呼吸。
なにか時空を吸い込み、訳の分からない世界に変えてしまいそうな呼吸だ。
「変な匂いね」
夕波は、至極御尤もな事を言葉にした。
「ここで深呼吸するとは、そういうことだろ」
「でも、他にはない魅力が此処にはある」
うーん。なんだろ。この小難しい感じ。タバコが変な匂いなのに、中毒になるような、そんなクセのある奴か、何かなのか。この変な匂いの空気に魅力を感じるとは実に奥ゆかしい。
確かに、変な匂いだが、自然の匂いでもある。都市部にはない自然の匂いが此処にはある。
風がそよぎ、川は流れ、草木は揺れる、土が舞う。

あれから暫く、遠くを眺めていたが、一向に火の手が大きくなったり、煙が出たりする事はなかった。きっと俗に言うボヤという奴だったのかもしれない。家の持ち主にとっては、何かを失った、やりきれない思いがそこにはあるのだろう。でも、それを僕らは良かったと思って、見ていた。人が死なない事だけでも大事なことだ。夕波はその何でもないような事も含めて、空気を感じているのかもしれない。僕も真似をしてみた。夕波は最初の一度から深呼吸を一旦止めていたが、僕が深呼吸をするのに合わせて、深呼吸を再開していた。ラジオ体操と同じ数だけ深呼吸をした。

夕波が沢山の空気を取り込んで吐き出したのを見て、僕はまた何かとんでもないことがおこるような予感がしていた。

夕波。訳の分からない事をこれ以上、吸い寄せるのはヤメような。

ギター

堤防に立っていた僕らは、もう奥の町並みは気にならなくなって、川を眺めていた。今日の川の流れは速い。晴れていたので、雨量は多くなかったはずだ。上流では雨でも降ったのだろうか。そんなことを考えていると。夕波がまた指をさす。

「あれ。凄くない？」

「え？」

どこだ。暗くてよく見えない。芝生程度の草が生い茂っているくらいで、よくわからない。河原は河川氾濫時立ち入り禁止みたいな表示もある。その時、僕は違和感を覚えた。杭でも刺さっているのかと思っていた所をよく見ると、ギターのネックらしきものが生えている。生えている？そんなわけない刺さっているが正しいか？ギターのネックが自生していたらヤバすぎるよな。

「なんかあるな」

僕は、まだ不確かな状態だった。はっきりとギターのネックが見えているが、にわかに信じ難い。僕らは河岸を降りて河原に降りることにした。近づくにつれて、ギターのネックであることが分かる。弦が張ってある。地中に弦は消えていた。誰がこんなことをするんだ？さっき

の深呼吸はひょっとして相当ヤバい奴だったか？こんなにスグに事を起こしてしまうなんて、信じられない。夕波が確信めいた事を言う。

「ギターのネックだね」

「埋まっているとは、なかなか感慨深い」

と夕波は付け加える。

夕波はこの事態を奇跡のように楽しんでいる。

「こんなことあるんだな」

僕らは、もう目の前まで来ていた。あれ、横に穴がいていて、四角い箱も収まっている。夕波もそれに気づいたようだ。

「横にアンプが埋まってる」

「あ、これアンプか」

なんで、埋める必要があるんだ？普通に置けばいいのに。そうするとギターを寝かせることになるか？いや、だとしても、アンプは埋める必要はない。ちょっと気付かれ難いようにはなっているか？だとしたら、誰かが、ここを保管場所にしているとか？いやいや雨がふったら、もう台無しだよコレ。僕らはギターのネックに手が届くところまで来た。

「あっ、コレボディのところも埋まってるけど、窪みの中に刺さっているだけで、土はかぶってないね」

夕波が状況を察して言葉にする。ネックのところに何かタグのようなものがぶら下がっていて、ボディの裏側でぶら下がっている様だった。
「ん？これなんか書いてあるぞ」
『このギターは捨てることにしました。誰かもらってやって下さい』と書いてある。これを読んだ夕波と僕は顔を見合わせた。
「捨てギターだわコレ。捨てギター」
夕波が良く分からないワードを口にする。
「捨てギターって？」
「捨てギターよ。ほら捨て猫とかあるでしょ。それのギター版だよ」
捨てギター？聞いたことないフレーズだ。日本人の何割が捨てギターと聞いてこの状況を目に浮かべるだろうか？でも、捨てギターというフレーズは心に刺さる良い表現だとも思った。
「なるほど、捨てギターか」
「どうする？コレもらっちゃおっか」
夕波はコレをもらってしまう気だ。なんか捨て猫バージョンなら、持って帰ってもいい？お母さん的な展開か？
「もらっても、使いきれないだろ」
ここは僕がお母さん役だ。猫を飼っても育てきれないでしょ的な？

「いや、これはかなり良いギターだと思うよ。持って帰ろう」
「売るつもりか？」
「弾くのよ。売ったりしたら人間としてどうなのかなって思うよ」
それにしても、さっき捨てたばっかりの感じでギターは綺麗だ。ご丁寧にアンプらしきものまでついている。これだけ綺麗な状態で捨てるとは、どういった都合なのだろう。現代社会においては古物商なるものが発達していて、どこでもお金に変えれる。なんだか高そうなギターだ数十万はするかもしれない。それにアンプも二・三万円はしそうだ。ローラントのキューズストリートＥＸという奴らしい。なぜこんなところに捨てギターしてしまうんだ。あー。今は猫を捨てる時も専門の施設があると聞いたことがある。さすがに憚られるという世間体の悪さがあるのかもしれない。このギターも古物商にあずけると世間体が不味いのだろうか？そんな話は聞いたことが無い。おっ、このアンプ乾電池駆動しそうな気配。試しにスイッチを押してみた。
バチッ！ブーンというアンプ独特の音がした。
「お！これモバイルアンプなんだ！」
夕波は嬉しそうに言う。
夕波はあたりを見廻す。なんかのどっきりじゃないのかコレという感じだ。ドッキリをするならこんな時間にはやらないだろ。こんな暗い映像じゃバズりようも無い。最近は一般人によ

る映像配信によって広告料から生計をたてているウーチューバーってのが流行ってるらしい。それにしても誰もいない。ここで殺人があったら、次の日まで発見されない勢いはある。

「これ、左利き用だ」

「あーほんとだね。左利き用だ」

夕波の言葉を反復した僕は、ギターを軽く握って構えてみた。

「ん。左だ。間違いない」

「いや、構えなくても左だから」

夕波は僕の行動が浅はかだと言いたいらしい。見れば分かる人には分かるのか。そういえば夕波は左利きだ。

「なんか、すごい巡りあわせを感じるね。夕波を待っていたような感じ」

「んー。私もそう思う。これは私が使えってことだわ。これ、すっごい高いよ。フェンターのストラトキャスターでプロフェッショナルⅡって奴ね。たぶん十五万以上はしたような。しかもＡＭＤのアクティブピックアップに交換してある」

？

夕波は専門用語を繰り出す。ひょっとして弾けるのか夕波。

僕はコレは専門外だ。音楽はよく聞くけど。フェンターはなんとなく聞いたことがある。ギター製造メーカーの一つだ。プロもよく使う。ストラトキャスター？プロフェッショナルⅡ？

アクティブピックアップ？ＡＭＤ？わからないことだらけだ。
「ストラトってのが、高いってこと？」
「ストラトキャスターはギターの種類だよ。こういうカタチでシングルコイルのピックアップが３つついてるし、ボディには丸みがなくて平たい。平たくないのはレスポールっていうの、若干の丸みを帯びた筐体で弦の付け根が進化していて、音程を制御するアームが付けられる」
立て続けにギター用語を並べられたが、分かりやすい説明だ。夕波は続ける。
「このモデルが高いっていうのは、フェンターだからってもあるけど、この全部の機能が素晴らしいからだよ」
夕波はテンションが高い。語る様子からも、それがよく伝わる。
「そんなに凄いんなら、なおさら、ここの捨てギターするのは謎だわ。どうしても手放さなければならない事情でもあったのかな？」
「想像し難いわね。人生初の捨てギターだからね」
夕波も初めてらしい。
「これ、試奏してみて、と言わんばかりよね。アンプもピックもあるし、ワイヤレスもついてる。ワイヤレスっていうのは、ギターのここの信号コネクタとアンプのここにさすコネクタの間が無線にできるってこと」
と言いながらギターの側面の穴と、アンプのコネクタの穴を指差した。アンプ側に２個挿さっ

ていたワイヤレスという奴の機器を取り外すと本来挿すべきところに挿しなおした。夕波は使い慣れている様だった。ワイヤレスの電源を付けると、夕波はギターのストラップをかけて、構えた。そして、軽く弦を弾いた。グィーンという歪の効いた音だ。凄くいい音だ。すると夕波は、アンプについていたＴＵＮＥというボタンを押した。一番低い音の出る弦を弾くと３つあるランプの左側が光った。夕波は何度か弦を弾きながらネックの先端のネジ（あとで知ったことだけど、専門用語でペグというらしい）を回して音の高さを調整しているようだった。手際よく調整していく。どうやら３つのうちの真ん中が点灯すると音があっている合図のようだ。６本分を手早く調節すると、次は、二つの弦を同時に引いていく片方はネックの先当たりで指で押さえている様だった。音の高さがあっているか確認しているようで、ネックの先についているネジを少し触る。そして、更にネックのギターに近い根本あたりで、同じようなことをやっている。ネックの近くでの確認のときにはネジは触らなかった。ギターとはこういう確認が必要な楽器なのか？僕は手際の良さに見とれていた。まさか河原でギターの試奏を聴かされるとは、思いがけないが、僕はどことなくワクワクしている。夕波のギター演奏が聴けそうな勢いだ。夕波がギターに興じているということは今までに聞いたことがなかった。自分の知らない事ってまだまだあるんだな。まぁ彼氏でもないし、部屋にもいったことが無い。そんなもんか。準備が整った夕波は演奏を始めるのかと思いきやアンプの前にしゃがみ込んだ。アンプのＥＱというところのＢＡＳＥと書いているところを強くしたようだ。アンプ部はブラック

パネルというところに合わせた。そうすると夕波は立ち上がり。演奏を始めた。最初は音階をゆっくり弾いていく。

「Dマイナーペンタトニックスケールね」

何を言っているかさっぱり分からない。謎の専門用語だ。

ひととおりの音階を弾き終わると、次はリフとよばれるものを弾いている。聞いたことがないリフだ。オリジナルかもしれない。女の子にしては、歪の効いた激しいリフだ。テンポも速い。指がめちゃくちゃ動いている。ヘビーメタル的な気持ち悪いコードでキンキンとした音とカチャカチャと鳴らす部分とが相まって、すごいうねりを感じる。夕波は軽くヘッドバンキングしている。次の瞬間、突然、ギターソロのようなものが始まった。速い。俗に言う速弾きというやつだ。すると夕波は

「アルペジオ奏法ね」

というとコードを押さえている指は動いていないのに弾く弦が違うことでとてもメロディアスな展開になっていく。するとまた夕波が発する

「フィードバック行くよ！」

そう声を張り上げると、曲の切れ間みたいな雰囲気になって、アンプに向かってしゃがみ込んだ。するとキーンというハウリングというものが起こった。カッコイイ。曲の流れに乗ってのキーンはかっこいい。すると一段と速い音の変化をする奏法になった。指の一つ一つが大きく

開き、なんだか大変そうだ。すると突然、右手で弦を押さえていたが左手で弦を押さえる。前後に動かす左手と右手の押さえているところが、絶妙な変化を与えていてそれでいてめちゃくちゃ早い。

「今の、ライトハンド奏法ならぬレフトハンド奏法ね。」

夕波は僕がギターに疎いのを悟ってか、弾きながら説明をしてくれる。すごく優しくて、普通だ。凄すぎるという点はあるが、訳の分からなさ加減は無く、普通だ。感動すら覚える。ただ一つ、訳がわからないとすれば、これが捨てギターから慣らされているということだ。アンプもワイヤレスも捨てられていたから、捨てアンプと捨てワイヤレス。複雑だ。すると、夕波はジャーンとかき鳴らすと右手はネックの板を押さえたまま、ギターを縦にすると左手はネックの先をつかみ。グウーッと手前に引っ張る。音が低くなる変化が起こる。

「ネックベンディングね」

凄まじい。いろいろ技をねじ込んでくる。テレビでよくロックバンドが演奏しているのを見るがあまり見たことが無い奏法だ。すると次は、テンポがゆっくりになったかのようなメロディーに変わるとピキーン・ピキーンとと急に高い音がなった。

「ハーモニクスね」

時折、ピキーンピキーンと音を出しながら、カチャピキーンという感じになったときに

「ピッキングハーモニクスね」

凄まじい勢いで技の説明をしてくれる。

そして、またコードを押さえた感じで、ジャカジャカやりはじめたが、コードの変化が秀逸で、その間にときどき、クイーンと音程が変わったり、音の前に少しだけ違う音を鳴したり、複雑なことをやったりする。すると急に、またアルペジオという奏法に変わった。かと思ったらまたジャカジャカしはじめると、

「弾き語り行くわ」

と夕波は言う。

時折、さっきのアルペジオの繰り返しを交えながら、歌う。

『（省略）』

歌いきると、夕波はエンディングに向かったコードを弾いてギターの弦の横にあったレバーをグイーンと弾くとコード全体が高い音になったり波のように変化する。そして、最後はジャカっと短く鳴らすと、その姿はロックシンガーのそれに似ていた。

上手過ぎる。これはデビューできる勢いなんじゃないか？

「これ、だれかの曲なの？」

「私の思い付き、うそうそ、コードの流れは試奏用に決めて合って、あとは気分って感じ」

いや、それでも大分と思い付きの部類だと思います。夕波さん。僕は尊敬の念を抱いていた。

「こんな特技があるなんて知らなかったなぁ」

「あれ？言ってなかったっけ？」
「聞いてないと思う」
「そっかそっか、私はギター好きだよ」
「じゃぁ貰った方がいいんじゃない？ギターの捨て主も、きっと喜ぶよ」
「そっかなぁ。じゃ持って帰ろうかな。ただギターケースとアンプケースが無いのが気になるなぁ」
何を贅沢を言ってるんだ。そんだけ揃ってたらビギナー入門も出来る。それにしても、いい音楽だったなぁ。これを僕以外の誰も聞いていないのが、残念でならない。夕波は持って帰ることに決めたようだ。
夕波はポケットからカードケースを取り出すと一枚の名刺を取り出し、カバンからペンを取り出すと、僕には見えないカタチで文字を書く。そうすると、ギターが埋めてあった穴の中に名刺を入れた。そして軽く土を被せた。紙の端っこだけが見える感じだ。
「誰が見るかわからないぞ」
僕は忠告した。
「いいよ。その時は、かかってこいだよ」
「捨て主さんにお礼を言っておきたいと思って、裏にメッセージ書いたよ」
僕はそのメッセージの内容を知らないが、書き方から見ても『ありがとう』の一言くらいだ

ろうと予測した。捨て主さんに見つけてもらうといいな。

弾きごたえを感じた夕波はアンプのスイッチを入れたまま、ワイヤレスのプラグを抜いた。アンプからブチッという音がした。スイッチを切る順番が間違えている気がするが、よく聞く音でもある。それから、ワイヤレスのスイッチとアンプのスイッチを消した。すると、ギターのワイヤレス側をカバンの中に放り込んだ。

「行こっか」

夕波は右手でギターネックを掴んで持ち上げて、アンプは左手でぶら下げていた。アンプに上部には取っ手がついている。持ち運びも便利そうだ。

「持とうか？」

「いいよ。どうせ、ちょっと歩いたら、自分で持って帰るわけだし」

確かに河原を出ればどうせ自分で持って帰らなければならない。なにより、手に入れたギターとアンプの素晴らしさに、重さを感じていない様子だった。

僕らは桂川を後にした。堤防の頂上まで来ると夕波が聞いてくる。

「これって、拾得物になるのかな？」

この一連の流れを法的な立場で考え直したようだ。僕も少し考え込んだ。

「不法投棄でしょ」

僕の結論はなかなか冷酷な判断かもしれない。

「そっか不法投棄か。そうだよね。捨て主さんはかなり良いことしてくれたのに、裁かれるんだね。不思議だね。えっと3カ月以下の懲役か、罰金20万円以下だっけ？」

「そこまで細かいことは知らないよ」

夕波はなかなかエグイことを言う。ギターの持ち主を牢獄に入れる勢いだ。夕波は河川の清掃行為をしただけに過ぎない。ゴミはお家に持って帰りましょう。ってところだな。

「なんで捨てたんだろうなぁ」

夕波は考えている様だった。僕にもその答えはわからない。適当な予想でも言うべきだったろうか、その後は、僕らが分かれる交差点まで沈黙が続いた。

夕波は別れ際に、

「じゃあね」

とだけ言い残して、夕波の自宅へと向かっていった。その後ろ姿は異様な光景であることに気づかされる。会社員が裸のギターとアンプを手に帰っている。これからすれ違う人たちは、ちょっとびっくりするだろうな。そんな、周囲の視線とは関係なく、当の本人、夕波の歩調は少し弾んでいるようにも感じた。それしても今日も一日、濃密な訳の分からなさがあったな。夕波は疲れないのかな？僕はちょっと考えすぎた脳に疲れを感じていた。

何にしても、夕波。いいギターに巡り合えて、よかったな。

事件

いろいろなことがあった一週間だった。捨てギターとめぐり合わせたあの日から数日がたった土曜日の朝になっていた。あの後、会社の人にも捨てギターの話をしたが、やっぱり藍さんだけは、受け入れが早かった。捨てギターと説明しただけで、捨て猫を連想したようで、理解力が凄まじい。しかも珍しいことだとも思わない様子だった。それよりも不法投棄うんぬんの話の方が長くて焦る。話の焦点がズレている。やっぱり懲役3カ月だそうだ。牢屋にぶち込まないと駄目だなとか言っていた。普通、罰金だけどね。むしろ事件性は低い。夕波がすぐに回収してしまったからだ。藍さんは夕波がギターが得意なことは知っていたようだった。

今日は休みで、特にやることも無い。夕波とよくつるんでいる僕だが、休みの日は比較的、夕波とは会わない気がする。一週間、いろいろと考えさせられ熱くなった僕の脳を休める大事な時間なのかもしれない。髪を切りにいったり、病院にいったり、掃除をしたり、家の用事の手伝いをしたりして休みは消化されていく。今日は体調は良いので病院は無し。彼女がいないから、遊びに行くことも少ない。一人で樟葉モールで買い物をする日もある。樟葉は淀より少し大阪側に位置していて、枚方市のテリトリーだ。京都と大阪の境目は樟葉と淀の間。このあたりにある。実際には橋本という駅と樟葉駅の間だ。他にも映画館に行ったり、ゲームセンター

に行ったりもする。家ではゲームはしない。現場で腕を磨く。これに尽きる。いい年して何やってんだかなぁ。そんな風にも思う。人とのつきあいがあるとしたら職場の男共で、飲み会をしたりくらいだろうか。今日はその約束もない。

あまりにも暇なので、ＴＶをつけてみる。６ｃｈは大阪ローカルの番組の旅番組と情報バラエティが楽しめる時間帯だ。そうこうしていると昼ごはんが自動的に出来上がる。この時、家族が一同に介する。軽く小言を言われ。そそくさと自分の部屋に退避する。こうやって、一日が過ぎていく。無駄な休日だ。だが、僕はそうならないように多少は勉学に勤しむ。といっても趣味のプログラムに没頭するだけだ。それで分かったことギッツというプログラムアップロード管理サービスと交流ウェブサイトであるキータというサイトのサービスを使う。もちろん、自前のコンテンツマネジメントサイトを作って、そこに記事を書きためるという方法もある。僕はそのメンドクサイ道は省いた。もっとやりたいことに集中するためだ。でも、こういう難しい趣味だから、エンジンがかかるまでに時間がかかる。それが午後なのだ。今はＴＶ。これが一番安らぐ。旅なんか、あんまりしない癖に旅番組を視る。旅の事情だけは無駄に詳しくなる。活用されることなく、この情報は脳の片隅にしまわれ、場合によっては、スッと消えていく。

スマホをいじいじと触って過ごす人も多いが、僕はスマホに縛られたくないのでＳＮＳツールのツブヤッキーとか、ｉラインとか、インスツグラムとか、テックトックとかはやらない。

連絡はメールで、重要なことはスマホで電話回線を使う。あれ、なんかメールが来てるな。メールアイコンの左下に数字が表示されている。1だ。誰からだろう。むむむ。近くの薬局店のお得情報だった。クーポンが発行されたとからしい。つまらん。ありがたいけど、つまらん。でも、一応、全文を読み切ってしまう自分。暇かオレ。暇だオレ。

暫く用も無さそうな、スマートフォンを軽くベットの上に放り投げようと思ったときだった。スマートフォンが振動した。新着だ。またクーポンか？

見ると、夕波亜津子と表示されている。なんだ？休みの日に連絡とは珍しい。文面はこうだ。

『緊急事態、至急夕波家6階へ参上セスルコト』

なんだこの、ノスタルジックな招集文は意味がわからん。6階とあるから、夕波の実家ではなく独り住まいのマンションの方の事をいっている。

とりあえず。暇だし行ってやるか。それにしても、部屋に呼ばれるのは初めてだ。案外簡単に男を部屋に入れるもんなんだな。害虫でも出たか？僕も虫は駄目だぞ。あの深呼吸を見て以来、おかしなことが起こりやすくなっている感はある。先日も職場で、藍さんがマジックを覚えたと言って、リフレッシュゾーンで披露されたりということがあった。僕が1万円札を出すとそれが千円札十枚に変わって、そのあと五百円玉に変わった。20枚くらいに増えて驚いたが、それを返された。僕の1万円が五百円玉になるという、とんでもなく迷惑なマジックだ。その演目を終えるとさっと消え去った。急に手品とは、またおかしなことをする。そして僕は

紙幣から貨幣に変換された五百円を一枚ずつ拾い上げると、気が付いた。五百円玉は１６枚しかない。２千円を掠め取られた。どうなってんだコレ。軽い窃盗だろ。詐欺。と思いつつも、そのような凶悪犯罪があったとは誰にも言えず。今日に至る。世にも恐ろしいマジックだった。この悪行は墓場まで持って行こうと思った。僕の慈悲を受けるがいい。藍よ。

無慈悲を慈悲で返す自分は神の領域に来ている。

さて、返信でもしてやるか。「ワカリマシタ」だな。ほいっと。

その後は、夕波からは返事はなかった。

とりあえず、夕波の家に向かうか。僕は簡単に身支度を済ませ、至急という言葉の通りに、やや急ぎ足で夕波の家に向かう道を歩く。マンションまでたどり着くと、セキュリティーゲートがあり、インターフォンで夕波の部屋の６０６という部屋番号を押す。すると、無言でゲートのカギが開く。すっと入ると、最上階に位置する夕波の部屋までエレベータで登り、夕波の部屋のインターフォンを鳴らす。しばらくするとカチャと音がして、扉が開き夕波が顔を出す。

「入って」

「おー」

と、入ると夕波がこっちに来るようにとベランダ側の一番奥の部屋まで案内する。そして、夕波が、ここから眺望できる桂川の河川敷を指さして言う。

「ほら、アレ」

そこには一人の金髪と赤髪が混じった頭の男性が堤防の内側の座り込んでいるように見える。
「どうした？」
僕は、よくありそうな光景に意味がわからず、夕波に確認する。そうして、僕らは窓をあけて、外側のベランダに出ていた。
「ギターを埋めてあった穴から名刺を取り出した人」
おー。そういうことか。
「まじか。よく見つけたな」
男性は座り込んでいて膝を抱え込んでいるが、名刺らしき紙が僕らに見えるように持っていた。膝の上にある下腕に目を当てるように座りこんでいる。ときおり肩が動いているように見える。泣いているようにも見えた。
「思い入れのあるギターだったのかもしれないな」
「返した方がいいのかな」
「いや、何かあったから、捨てたんだろ」
「後ろ髪惹かれるようなことはしない方がいいんじゃないか」
緊急事態とは、こういうことだったのか。今なら追いかければ間に合うかもしれない。
「それで、名刺の連絡先に連絡はあったの？」
「今日は在宅勤務用のパソコンを持って帰って来てないから分からない」

「それはしょうがないな」
しかし、絵にかいたようなギターリストっていう風貌だ。あんなに気合入っている人が何故ギターを捨てる。
「あの人、私がこれを拾ったとき堤防の一番上に居たのを見たよ。暗かったけど、あの派手な髪色は分かった。」
「そっか。見てたのか」
ということは、あの超絶プレイも見ていたのかもしれない。持って帰るのを止めなかったは、やっぱり、それでいいってことの表れだ。
「だったら、もらっておくべきだな」
僕の直感はそう言っている。
「何があったんだろうな。あのまま涙が切れるまで、泣けばいいんだよ。きっと、新たな一歩を踏み出せるはずさ」
「そうなのかな。あの人からギターを取ったら何かが残るような気はしないのだけど」
言われてみれば、そうも取れる。あの気合の入りようだ。来ているTシャツもなかなかイカツイプリント絵柄にも見える。答えのない疑問が僕らの中でうねりをあげている。
「連絡があったら返せばいいんじゃないか」
僕はそういう提案をした。どうしても返してほしければ連絡してくるはずだ。それまではそっ

として置く方がいい。

「そうしよかな」

あの派手さならどこかで見かけたら、気付きそうだな。でもなかなか再会できるものでもない事を僕は知っている。

ある程度の結論が出た僕らは、部屋の中に戻った。あまり見てはいけないのかも知れないが、夕波の部屋を舐め廻して見てしまう。先日のギターともう一つギターがある。既に二本ともギタースタンドに立てかけられている。ギタースタンドは購入したっぽいな。元からあったギターはボディの表面に丸みがある。夕波の言っていたレスポールというタイプのギターっぽい。ストラトキャスターが手に入り、2タイプを手に入れたことになる。部屋にアンプは一つしかないように見える。もともとは持っていなかったのかもしれない。あの後、調べてみたのだけれどストラトはストラトスフィアというのが語源で日本語では成層圏という意味があり、キャスターは伝える者という意味から来ているらしい。ちょっとカッコイイ意味がある。

そして、ノートパソコンのおいてあるデスクの横には88鍵盤のピアノが置いてある。キーボードタイプだ。机の奥側にはサーバのラックのようなものが、スチールラックの中に納まっていて、平べったい機器が4ユニットくらいが設置されている。サーバではなく音楽機材のように見える。平たい機器の一つには、先日のワイヤレスが差さっている。ここから音が入力されてパソコンに音の情報が転送されるのかも知れない。あとの3つは何かわからない。一つは

2Uという2ユニット分の厚みがある。だから使われているのは5ユニット分ということになる。何に使うものなのかはわからない。パソコンの両脇には十五センチくらいの直方体のスピーカーが程よい高さに備え付けられている。パソコンを置いている棚自体は、このためにあると言わんばかりに全てがフィットしている。

本棚には、大学で使ったと思われる専門書がズラリと3段ほどに収まっている。高さもぴったりの棚だ。少し大きい参考書はもう一つ下の段が広くなっていて、そこに収まっている。見た感じ、学問の種類別に分類されて収まっているように見える。几帳面だな。一番下にはマガジンラックのような構造になっていて、蓋を持ち上げるとその奥にも本がありそうな気配だ。ベッドの頭の部分にも棚があって、そこには漫画がズラリの並んでいる。一番読みそうなものは近くにあるのかもしれない。どっちかというと漫画に重きを置いているのかもしれない。4段くらいある本棚には透明のカバーがついていて、しっかりと閉じられている様子だ。見たことが無い家具だ。まだまだ漫画は置けそうだ。あーそっか、棚の大きさ的に漫画しかおけないのかも知れない。一番上は扉がシャッターのような構造になっていて、高さにほとんど上限がないので、イレギュラーにも対応できそうだ。少年物と少女物の漫画がひしめき合っている。真ん中にある低いテーブルは、足のところが伸縮できそうな構造になっている。いろいろ観察していると、夕波が声をかけてきた。

「もう帰っていいのだけど」

え？呼び出しておいて、早々に帰れとは、悪の所業だな。

「そうだな、帰るか」

「うそうそ、そんな悪の所業のようなことは、しないよ。飲み物でも飲んでく？」

「あ、そうなんだ。そうだよな。じゃ呼ばれようかな」

「じゃあ、そこに座っていいよ」

窓に向かって座るところと、窓に向かって右側だけ丸い座布団というかクッションというか、そういうものが置いてあるので、後者のところに腰を下ろした。テレビが左にある関係なのだと思う。テレビは55型くらいある有機ELのモノだ。型番から僕はこういう道具にまつわる詳細がわかってしまうのは僕の才能の一つだ。

座ってからも、もの珍しいものを見るように見渡してしまう。夕波はお茶を淹れるべく、オープンキッチンのあたりで作業をしている。いい部屋だ。ふと上を見上げると、ロフトらしきものがある。天井が高い。最上階だからこその設備なのかも知れない。何に使っているのかまでは、見ることが出来ない。女性独特の秘密の花園がそこにはあるのかも知れない。見えない所の詮索は良くない。綺麗な部屋で生活感を感じない。テレビの下には小さいレコーダーがついていて、発光型のデジタル式の電波時計が備え付けられている。夜でも時計が読み取れる優れものだ。少し暗めなので、明る過ぎるもの睡眠の邪魔になるのかもしれない。日付、温度、湿度、天気予報、気圧、時間。もの凄い情報量だ。こんなの売ってるのか？

「なにをジロジロみてんの？」
「いや、初めてでやっぱモノ珍しくて、ついつい。悪い」
「あれ？この部屋初めてだっけか？他の人かな入れたの？結構、みんなで何回か集まって、家呑みとかしたことあるんだけどなぁ。いなかったっけか」
そんなにオープンに誰彼構わず招いていたんだな。僕は仲間外れか。すこし寂しい。好きな女の子の処女を奪われたような気持になっていた。いや好きとかそういうわけではない。幼馴染として見くびられた思いだ。
「じゃやロフトの上も見ていいよ」
え？見ていいの？秘密の花園じゃねぇの？
「あ、いいの？」
僕は立ち上がってロフトの階段に上った。
「なんじゃごりゃ！」
僕は、松田裕蔵張りに大きな声を上げてしまった。上にはなんとNゲージのジオラマがおいてある。奥にはラジコンの一式と思しきものや、釣り竿。しかけ道具と思しき箱とタックルケース。電動工具や通常の工具。比較的透明の箱が多い。何処に何があるかわかりやすい。わからなそうな箱にはシールが貼ってあって何がはいっているかがわかるようになっている。ジオラマは淀駅周辺の地形になっていて、トンネルになっている部分の上が床になっている。その上

には、道具がおいてある。ジオラマは見えない所で周回しているようだ。そして淀駅周辺を忠実に再現した地形の部分がジオラマになっていて、京阪電車の車両が何タイプかがいてある。車両基地のところにはいろんな電車がおいてある。なかには他の私鉄やJRの列車もある。この淀駅にはありとあらゆる電車が乗り入れてしまう幻のジオラマになっている。

「これは凄いね」

「奥の方に座って、桂川とNゲージが回るのを見ながら横になるのが、暇つぶしにいいんだよね。見てて飽きない」

なるほど、ある意味で秘密の花園だな。いや楽園か。凄すぎる。オトコっぽい趣味が多いのが気になる。

「この部屋、防音なのか？」

僕は壁の構造がデコボコしているのを見て、これって吸音材じゃないかと思った。

「そうだよ。防音にしたの」

「防音にした？」

「そう、自分で防音にしたの。音はほとんど漏れないって、お隣さんや、真下の人が言ってた」

自分で、ここまできれいに施工できるとは職人技だな。なるほど、ところどころに改造のあとが見られる。全部の床が持ち上げられているんだな。そして下にも防音材。上にも防音材が綺麗にハマっているのかもしれない。見事な仕上がりだ。

「でもテレビに5．1chのサラウンドも無いし、アンプもなかったっぽいし、音の出る要素があまりなさそうだけど」
「夜にギターを弾くとなるとエレキギターとは言え気になるモノよ」
めちゃくちゃ気を使ってるんだな。夕波は。でもここで殺人事件に巻き込まれて大声をあげても誰も気付いてくれいないよな。そんなこと起こらないだろうけど。
「窓も取り換えたんだよ。このガラス真空になってるんだって」
「へぇー」
なんか素朴な部屋だけど、ものすごい拘り抜いた作りになっている。
「冬はこのテーブルを少し高くして、周りに組み立て型の箱をいくつか設置して、掘りごたつになるんだ」
「ほぉー」
なんだ、その拘りに拘り抜いた設備は。
「居心地よさそうだな」
「まぁね。実家飛び出しただけの事はあるでしょ」
ふむ、わからんでもない。この楽園を求めて、飛び出したんだな。Nゲージは場所をとるよな。僕もこの部屋でドミノでもやってみたい。
夕波は冷蔵庫を開けて、買ってあったケーキらしきものを取り出した。盗み見た感じでは、

かなり食材が入っているようだった。自分で料理するんだな。調理道具も揃ってそうな棚になっている。箱からホールケーキを取り出すと、台所の下から包丁を取り出し、ケーキを切り分ける。そんなデッカイの買ったの？

「え、これ作った奴」

「マジでか！凄いな。それ作れるんだ」

「味は店のより劣るよ」

劣っても、その見栄えなら十分だ。みるからに美味しそうなイチゴのケーキだ。

「やっぱ作り過ぎちゃうんだよね。こういうのって。ちょうど良かったよ。呼ぶことにして」

たまたまなら、これを食べれるのはかなりラッキーだ。

そうするとオープンキッチンの上に紅茶と切り分けたケーキが2つずつ置かれた。

僕は気を利かして、それをテーブルに運んだ。

そうして、夕波はあとからフォークを持ってきた。そして、二人が席についたところで、二人とも軽く手を合わせて

「いただきます」

と食事の挨拶をする。紅茶からまずは頂く。くっと飲み込むと、いままでに感じたことのない深み、えぐみの無さ、すべてが新鮮な味がする。

「今までの紅茶と少し違う。うまい」

僕は思わずつぶやいた。
「あ、それオレンジペコね」
「おーこれがオレンジペコか」
「それがオレンジペコ」
夕波は、先日の僕がオレンジペコを知らないということをきちんと理解してくれていた様だった。
「味の違いに気づくなんてナカナカね」
僕はケーキにも手を付けようと、フォークをにぎりケーキのヒトカケラを口に運ぶ。
「ん！これはうまい」
咀嚼しながら、思わず声がこぼれた。その時だった。
突然、ベランダから大きな音がドガーンと聞こえ、ベランダの方に目をやると、一人の女性が左から転がって来た。転がった身体は柔道で巴投げを食らったかのような体勢で止まった。どうなって、こうなった？ベランダに飛び込んできた女性は、身体に纏わりついた破材を払いながら立ち上がった。ばつが悪そうに会釈すると、ベランダから窓を開けた。さっきベランダの外に出た後、鍵をかけるのを忘れたようだった。
「すみません。突然」
確かに突然過ぎる。それよりどうなって、こうなったかだ。夕波も少し身体が固まったまま

の様子で、呆気に取られていた。
「あ、隣の」
夕波がここまで言葉を口にすると、女性は口を開いた
「あ、そうです。隣のカミテグラです。ちょっと訳があって、ベランダの仕切り、突き破っちゃいました。ごめんなさいね」
「いえ、お構いなく」
夕波っ！お構いなくじゃないだろ。これは構うところだ。ベランダの仕切りを突き破るのは非常時だけだろ。たとえば火事とか地震とか。
「ケーキあるんですけど、食べます？」
夕波はホールケーキがかなり余っているのを思い出したかのように、カミテグラという女性にケーキをすすめた。切り替えが早すぎる。もうちょっとこの異常な光景についての話をするべきなんじゃないか？
「じゃあ。頂こうかな」
「ちょっと待っててくださいね」
と言うと夕波は、キッチンの方へと向かう。
「座布団ないですけど、その辺に座ってください」
カミテグラさんは、僕の右側。テーブルの窓の方向側に座った。

「お取込み中でした？」
カミテグラさんは、僕らがやましいことをしていたのでは無いか？邪魔をしたのではないかと、気にかけている様子だった。
「いえ、親しいくらいの中なので、お取込み中ではないですよ」
僕は、そう返事をした。というか、なんでこんなにスムーズにこんな風にテーブルに座る流れになった？驚くべき事態だぞコレ。夕波も夕波ならカミテグラさんもカミテグラさんだ。
「そっか、夫婦じゃないんだ」
夫婦？そんな風にも見えるのか。広い部屋だが、間仕切りが取っ払われているだけで、二人位が生活できる空間でもある。夫婦で住んでいる人もいるのかもしれない。
「私、カミテグラ　アミって言います。神様の神に、手足の手、それから倉庫の倉で神手倉です。あ、あみのアは亜細亜の亜で、ミは未来のミです。」
すると夕波は、キッチンから声をかける。
「彼は君くんって呼んであげてください。私は夕波です。夕方の夕に波形の波です」
すると神手倉さんは言う
「亜津子さんでしょ。知ってますよ。玄関にネームプレート付いてましたから」
ここに来る時には気が付かなかったが、今どきネームプレートを出すとは珍しい。ある意味で不用心とも言えるが、おおらかな心の持ち主とも取れる。僕は話を戻すことにした。

「なんで、突き破っちゃったんですか？」
「あー過去から戻るときにうまく行かなくて。あ、違う違う。えーっと、ほらベランダで、逆立ちでもしようかなって思ったら、バランスくずしちゃって、そうそうバランス」
何かを隠している様子だったが、前者も意味がわからないし、後者も普通じゃない。念のため確認する。
「過去から？」
「いや、それは違うくて、バランスだよ。バランス」
どうやら過去からの方が正しそうだが、過去からというのは合点がいかない。あり得ない。
「管理会社さんに言ってスグ直してもらいますから。仕切り」
「急がなくてもいいですよ。気になりませんから」
夕波！もうちょっと気にしろ。気に。
「では、お言葉に甘えて」
あなたもあなた！甘えるところじゃない。つうか話を逸らしたか？それにしても、綺麗な人だ。目が大きくて、綺麗な二重だ。少し丸顔だが、肌がきれいで、パーツのバランスが良い。芸能人と言われても驚かない出で立ちだ。むしろ芸能人の誰かに似ている気さえしてくる。なんせ胸も大きい。夕波より遥かに大きい。夕波の裸を見たことはないが、明らかにそう見える。どちらかというと、僕は胸にばかり目が行ってしまう。

Tシャツからはうっすら下着も見える。エロい。下は短パンで、足が綺麗だ。彼女がこんな人だったらいいなぁと思ってしまうほどだ。でも、気になるとすれば、夕波や大愛さんのようなヤバいオーラを出していることだけだ。僕の思う普通の人の性格より大きく逸脱している。ベランダを突き破ってスグに普通にケーキをごちそうになろうとしている。

「お待たせしました」

夕波がケーキと紅茶をもってくる。

「ありがとう。わたし紅茶好きなんだぁ」

くいっと紅茶を一口。

「あー。これオレンジペコ！」

まじでか！凄い味覚の持ち主。神手倉！恐るべし。

「そうです。オレンジペコです。」

「いやー。オレンジペコとは渋いね。かなり通だね。私は、普通のティーバック形式の紅茶ばっかりだけどね。いやー。ここでオレンジペコとは。ありがたい」

むむー。彼女の味覚に嫉妬する自分。

「お、おー。このケーキもナカナカ美味しい」

「あ、それ夕波の手作りです」

夕波は嬉しそうだ。僕も、このケーキはかなり美味しいと思う。悲惨な状態になったベラン

ダを横目に、僕はケーキを頬張る。その時だった。

突然、ベランダから大きな音がドガーンと聞こえ、ベランダの方に目をやると、一人の女性が右から転がって来た。転がった身体は柔道で巴投げを食らったかのような体勢で止まった。この光景。今さっき見たばかりだ。デジャブって言うんだっけこういうの。ベランダに飛び込んできた女性は、身体に纏わりついた破材を払いながら立ち上がった。ばつが悪そうに会釈すると、ベランダから窓を開けた。

「すみません。突然」

いや、それさっき聞いたから。少し慣れている自分に嫌気がさす。

夕波も少し身体が固まったままの様子で、呆気に取られていた。

「あ、隣の」

夕波がここまで言葉を口にすると、女性は口を開いた

「あ、そうです。隣のシモテギです。ちょっと訳があって、ベランダの仕切り、突き破っちゃいました。ごめんなさいね」

「いえ、お構いなく」

いやいや、それちょっと前にやり取りした奴！もっと気にしろ。気に。

「あれ、ベランダの反対側も壊れてるんですね」

シモテギさんという女性はそういって、僕の正面に座り込んだ。

「あたし、シモテギっていいます。獅はししまいの獅。モテギは生い茂る茂。木は樹木の木です」
聞いても無いのに名乗った。なんだこの人は。この人はどっちかって言うとモデル雑誌に出てそうな感じの人だ。僕のタイプではない。胸はぺったんこだな。夕波よりは、あきらかに小さい。神手倉さんも驚いている様子だ。さっき己がやってのけたことなのに、ありえないことが起こった様な表情だ。あざとい。獅茂木さんは、あたりをくるくる見回すと、
「夕波亜津子さんですよね」
夕波の方を見て、名前を言い当てる。ネームプレートか？お構いなくと言った主が夕波だと考えるのも道理が合う。
「そうです。ケーキと紅茶があるんですけど。食べて行きます？」
獅茂木さんは少し考え込んで
「では呼ばれようかな。お願いします」
獅茂木さんは僕の顔を見て、
「夕波さんの彼氏さん？」
「いえ、そういうのでは無いです」
「そうなんだ」
夕波がキッチンの方から声をかける。
「君くんって皆、呼んでいます」

「そっか君が君くんか。よろしく」
獅茂木さんは握手を求めてくる。僕は握手に応えた。なんだこの人懐っこい性格は。友達が多そうな気配がする。
「私ね。下の名前は亜香子って言うんだ。アカコって呼んでもいいよ」
アカコさんか。僕は神手倉さんへ向けた問いかけと同じことを聞いた。
「なんで、突き破っちゃったんですか？」
「あー未来から戻るときにうまく行かなくて。あ、違う違う。えーっと、ほらベランダで、逆立ちでもしようかなって思ったら、バランスくずしちゃって、そうそうバランス」
その時だった。神手倉さんがぎょろっとした目で、獅茂木さんに視線を送る。ひょっとして過去と未来で何か繋がったのか？本当に過去と未来から戻って来た人達なのか？宇宙人みたいな感じか。不思議だ。僕は彼女たちの事を不審人物だと感じるようになった。過去とか未来とか妄想して、生きてる痛い奴らなんじゃないかと思えてきた。そして、同じような言い訳をする同期精度。ベランダを突き破るという非日常が左右からと2パターン。恐ろしい。今週はあれこれ事件が多すぎるだろ。
「お待たせしました」
夕波がケーキと紅茶をもってくる。
「ありがとう。わたしケーキって大好きなんだ」

そういうとケーキから一口。
「おー。これはうまい！どこのケーキよコレ」
テンションんが高ぶる。神手倉さんが口を挟む。
「これ、夕波さんが作ったんだって」
「へぇ。これは買い付けたい味だね」
いや、非売品だからソレ。それにしても一気に賑やかになった。夕波もケーキと紅茶の準備で忙しそうにしていたが、一段落して、座布団の上に座る。そうすると夕波は神妙な面持ちになり、口を開いた。
「あのー。亜未さん、亜香子さん。過去とか未来ってどういうことですか？」
直球！めちゃくちゃ凄いストレート出た。分かってても打てない奴だなコレ。夕波も忙しそうにしながらも、よく話を聞いてるもんだ。僕が疑問に思うくらいだから、夕波もそりゃ疑問に思うよな。僕は固唾を飲んだ。しばらくの沈黙が続く。この沈黙ならカメラが３６０度パンしても可笑しくない。パンとは専門用語だが、カメラを撮影しながら一方向に動かす動作だ。
「あのー。信じてもらえないと思うんですけど」
と二人ともが同じ言葉を紡ぐ。二人は顔を見合わせる。
「未来に行けるんです。私」
「過去にいけるんです。私」

また、沈黙が続く。どういうことだ。未来に行ける？過去に行ける？亜未さんが過去で、亜香子さんが、未来？名前から考えるとテレコだ。未来の未のついた亜未さんが過去で、亜香子というカコという名前をもつ彼女が未来。いや、それ以前に行ける訳がない。

「私は、亜未さんの言う事、分かるような気がします」

「私も、亜香子さんの言う事が分かるような気がします」

互いが分かりあう展開。どういうことだ。情報が大渋滞だ。一気に二人も変な人が僕らの中に入って来た。あの時の深呼吸。大分と吸い寄せているなコレ。いや、もともと訳わからない事を吸い寄せるブラックホールの才能を持つ夕波。物凄いモノを引き寄せた。

「そうですか、過去にも未来にも行けるんですね。なるほど」

夕波は立て続けに論ずる

「それで亜香子さんは過去に行けるんですか？」

「いえ、行けないです」

「亜未さんは、どうなんですか？未来に行けるんですか？」

「行けない」

状況を整理したようだ。一人で過去や未来に自由にいける訳ではないのか、二人で一つって感じなんだな。それがここで融合してしまった。本当ならば凄いことだ。僕は突き破られた両側の仕切りを見て、真実めいたものを感じていた。こんなこと、早々簡単に起こるもんじゃない。

二人は折檻でもされているように下向きになっている。壁を壊された側の夕波には怒る資格はあるが、別に夕波が怒っているわけでもない。

「それで、このことは誰か他に知っている人がいるんですか？」

亜未さん、亜香子さんの順で応える。

「わたし以外は知らないと思う」

「わたしもわたし以外はしらないはず」

「わかりました。なんだか、複雑なので、この話はまた今度にしましょう。他の人には誰にも言わないで下さい」

え？どういうこと？今ここでつまびからにするべき事案のような気がする。しかも、この問題の対処方法を夕波は知っているかのような感じだ。普通は実際に未来に行ってみたり、過去に行ってみたりして、何か問題を起こしたり、つじつまを手繰り寄せるのが、タイムトラベルモノの小説やドラマやアニメや映画では定説だ。それをここで全スルーしようとしている。

「はい。言わないようにする」

「わたしも、言わないようにする」

お説教でも受けたように夕波に誓う二人だった。そういい終わった僕たちは、テーブルの上の紅茶とケーキを再び堪能し始めた。そして、黙々と食べたり飲んだりを楽しんだ後、しばらく、余韻を過ごしたところで亜未さんが言う。

「あとで、また食べに来てもいい？」
「いいよ」
亜未さんと夕波のやり取りを見て亜香子さんも
「わたしも、いい？」
「いいよ」
そう言うと二人は、ベランダ越しに、自分の部屋に帰って行った。いやいや、普通に玄関から帰っていいんだけど。あ、鍵がかかっているのかもしれないな。裏はツーツーだ。今やこの3部屋は一つ屋根の下と化している。
「仕切り、直さないの？」
「うん。暫くはいいんじゃない？」
あっけらかんとした夕波の性格らしい答えだった。
僕はベランダの窓の傍にたった。桂川の河原をみると、まだ金髪と赤髪まじりの男性はそこに座り込んでいた。
夕波。今日は不思議なことの大渋滞だったな。

タテツヅケ

とんでもないことが起こった後、僕は家路についていた。これは偉いことになった。未来に行ける人と過去に行けると言う人が一同に介しただけではなく、それが夕波の部屋のベランダで繋がってしまった。今夜、あの3人はどういう風に過ごすのだろう。もう一度、話し合いでもするのかな？夕波は未来に行ったり、過去に行ったりするんだろうか？そもそも一緒に行けるモノなのか？仕組みが気になる。夕波は、緊急事態に動じなかったな。一旦、タイムリープ？タイムトラベル？タイムマシンなんだかわからんが、話を止めてしまう程だからな、凄い決断だ。夕波を持ってしても、この事態は理解し難い出来事だったのかもしれない。

なんなら、僕はあの衝撃の出来事があったとは思えない程、普通に帰路についている。こんなもんなのか？未来や過去にいけることが分かった人の姿とは。いや、これも普通じゃない感じはする。なんで僕は家に帰っているんだろう。未来や過去だぞ。そして、捨てギターの主。何か一つくらいは型をつけたかった。

そういえば、河原の彼はどうしているんだろう。ちょっと見に行くか。

僕は河原の頂上にまで上がって来た。見渡すと、そこには誰一人いなかった。帰っちゃったか。残念だ。ちょっとくらい話を聞いてみたかったな。僕はまだ昼も前なので、駅に向かった。ふ

とした思い付きで、行きつけのゲームセンターにでも行こうかという感じだ。それしても、ギター上手そうな風貌だった。プロでは無いのかもしれない。ギターとの決別を行わなければならない状況ってなんだろう？って考えると、やっぱり挫折なのかな？それとも誰かにヤメロって言われたとか。それにしても捨てギターとは変わった道を選んだものだ。藍さん曰く、不法投棄で懲役半年らしい。泣いていたみたいだった。ああいう感じの人でも泣くんだな。同じ人間だからな。勝手にロッカーイコール心臓が強いみたいなイメージを持っていた。

しばらく歩いて、淀駅の構内に入った時だった。

一人の女性が僕の肩を叩いた。顔に目をやると知らない人だった。

彼女は不敵な笑みを浮かべなら、左の手で駅の出口を指さした。

「幸せはこっちだよ」

「えっ？」

「ほら、ついてきて」

これ、ヤバい系の人か？今まで生きて来て、幸せと言うモノの在（あ）り処（か）を明確に指示されたことはない。そんな都合のいい話あるはずが無い。過去の不幸せな出来事だけが記憶を辿る。そんな風にしていると、彼女は駅の出口の方へと姿を消そうとしていた。自分は深い思慮もなく、幸せのある方へ歩き出していた。幸せってなんだろう。その女性が可愛いというのも理由の一つだった。やましい事、この上ない。あとで怖いお兄さんが出てきて、大変な

ことになるケースも知っている。
　ちょっとだけ走ったけど、彼女の姿を見失うことなく、ちゃんと彼女の後ろをついて歩くことができる様な距離まで詰める事が出来た。このまま歩いていけば、幸せを目にすることが出来るのだろうかと、淡い期待を持ちつつ歩（ほ）を進める。
駅を出て、割かし歩いた。駅前の交差点も通り過ぎて、住宅街へ続く道へと入って行った。駅周辺の地理には長けていて、ここが何処だかは良くわかっている。だからこそ、こんなところに幸せなんて無いと、薄々気付き始めた。それに、僕が歩いてきた方向を逆戻りしてるだけだった。少しだけ細い道を使っている印象はある。ここまで何も会話もなかったが、声を発することにした。
「おい。幸せとか、嘘なんだろ？」
　すると前を歩く彼女は、歩きながら振り返り、器用に自分を見ながら、後ろ歩きを始めて不安そうな自分の表情を確認するように見つめて言う
「あるよ。嘘なんかじゃない。それに君は内心、期待しているから着いて来ているのでしょ。自分を信じなさいよ」
　改めて見る彼女の姿は綺麗で、スタイルもいい。ボンキュッボンって奴だろ。お尻が大きいまでくると、完璧なスタイルだ。最近、割かし美女との出会いが増えている気がする。そんなことはどうでもいいか。会話の内容に話を戻す。とにかく、彼女の言葉は自分の心の内を見透

かしているような言葉だ。何かの測定器があれば９９％の一致率を示す事だろう。
「期待はしてないよ。君を試しているだけだ」
強がってしまった。そんな自分を見てか、彼女は微笑みを浮かべた。そして、くるりと回って、また歩き出すかと思うと、いきなり全力で走り始めた。
「おい！逃げるのか！」と声をかけて、追いかけるように、自分も走り出していた。五十メートルほど、走ったか、そのくらいに、全力疾走しながら彼女が言う
「声かけて、追いかけて。駄洒落か」
全力疾走しながら、しょうもないことを言う。あほか、こいつは、いや、何かを試されている気さえする。
「君が逃げるからだろ！そりゃ、声かけて、追いかけもするだろ！」
「逃げるわけない。逃げるなら、こんなにゆっくりは走らない。この先に幸せもある。急がないと幸せが逃げるよ」
あんたが逃げて、幸せが逃げる？意味がわかんねぇ。それにしても、これで全力でないとは、ひょっとして、この人長距離の選手かなんかなのか？あまりの速さに困惑していると、壁があるような角になっている所、大きな道に出る曲がり角で彼女はヒョイと方向転換した。やべぇ壁に隠れて見失うかもしれないと、速度を上げて曲がり角の先を窺う。まだ彼女の姿はあった。このまま、行けばいつも夕波と分かれることになる交差点だ。ちょうど信号は青で桂川の方に

渡った。そのまま、彼女は堤防の上に駆け上がっていく。僕はもう大分と疲れていた。走りに走ってのこの階段は疲れる。彼女は堤防を下る道へと向かっていった。なんでこんなに僕は追いかけているんだろう。このまま近づけば、美女と知り合いになれるという、やましい気持ちしかないのかもしれない。幸せとはそういうことなんじゃないのか？美女と知り合いになれる。彼女は宮前橋の橋の下にまで来て、川の一番淵に立った。僕は大分と置いていかれたので、まだ走っている。もうこれ以上先にはいかなさそうな空気を感じて、走りを緩めた。何より疲れていた。川淵に立つ彼女は、次の瞬間、驚くべき行動に出た。服を脱ぎ始めた？えっ、ここでエッチなことするってこと？

お金とかそんなにもってないけど、背を向けている彼女はみるみる脱いでいく。

「ちょっと、何してんの？やめなよ？」

僕の静止にも関わらず、どんどん脱いでいく。もう上は脱ぎきって背中が見えている。そして、スカートもバサッと下げるとお尻も見えた。ショーツも同時に下げたか、もとからはいていなかったか？綺麗な姿だった。あとは前を向いてくれたら、僕の興奮は頂点に達するという感じだ。そう思った次の瞬間だ。

彼女は汚い桂川の中に飛び込んだ。

「えっ？」

水泳選手のような綺麗な飛び込みで水の中に消えた彼女は、泳いでいくのかと思ったら、潜

水をしたようで、川面に浮かび上がることはなかった。僕も川の淵に辿り着いていた。

僕は呆気に取られて暫く見ていた。いずれ浮かび上がるだろうと思った。濁った桂川の水質のせいで見たいと思った裸も見れない。暫く待ったが彼女は一度も上がってこない。軽く2分くらいはたった気もする。流石の僕も心配になってきた。2分は人間の限界付近だ。僕はあわあわし始めた。助けないと駄目かコレ。悪ふざけにしても度が過ぎる。とにかく裸になるのはアレなので、ズボンのポケットにはいっていた、クリップされたお金とスマホを取り出し、草陰に投げ入れ、上着を脱いだ。少し、勇気が出るまでの間を取った。

そして、飛び込んだ。冷たい！。やべぇ心臓止まりそう。準備体操してなかった。いや大分走ったので身体は温まっているはず。僕は潜水しながら彼女の姿を探す。これは新手の詐欺かもしれないとも思っていた。河原にお金とスマホを捨てたからだ。だが、それにしては手が込み過ぎている。こんな冷たく汚い川に飛び込むなんて、面倒くさ過ぎる。割に合わない。とにかくいろんなことを考えながら彼女の姿を探すが全く見つからない。

あ、僕の息が持たないと思い、水面に身体をあげた。彼女の姿はない。僕は大きく息を吸い込んで、もう一度、潜る。やべぇぞコレ。沈んでたとしたら、致死率がかなり高いところまで来てる。何度か僕は潜ることを繰り返したが、見つからない。彼女の服が置いてあるのが遠くからも分かる。ダメだ。いない。もう望みも無くなったくらいの時間がたった。誰か、助けてあげてくれ。そうだ、助けを呼ぼう。スマホだ。僕は飛び込んだ位置まで戻って川から上がっ

た。スマホを拾い上げる。ふと目に飛び込んで来たのは、先ほど飛び込んだ彼女の服だ。下着を上も下も置いてある。やっぱり、はいてたのかショーツ。いやそんな場合じゃない。ふと見るとその傍らに、紙が落ちている。そこには文字が書いてあった。

『救急に連絡する必要は無いです』

「え？」

これは、なんかカラクリがあるのか？マジックみたいな奴か。僕は持ち上げていたスマホを降ろした。どうなってんだコレ。僕は改めて、辺りを見回す。人間が川に這い上がる様子も無い。数キロ四方に誰もいない。誰も見てないのかもしれない。この奇を衒う状況。近くのマンションでコチラを見ていた人がいたとしたら、目撃者はいたかもしれない。少なくとも幻ではない。ここに衣服が残されている。紫のエロい下着だ。普通に陰部が当たっていたころが、上を向いている。上は、青と白の幾何学模様のシャツで下は赤いスカート。そして、紫のお揃いの下着。そして謎のメッセージ。僕は十分くらい同じ場所で待っていた。

誰も現れない。この服とかどうするのコレ。彼女は服は着ないで帰るのか？捕まる奴だよな。あの美女が裸なら儲けものだけれど。

それなら表側見たかったな。何言ってんだオレ。この服、持って帰っとくか？いや、カバンも持ってないのに、これ持ってたら結構変出者だぞコレ。うわー悩むわ。家まで結構あるからカバンを持ってくるというわけには行かない。その間に誰かが持って行くかも知れない。誰か

を呼ぶにしてもコレは信じてもらえないゾ。なんでこんな薄着なんだよ。それに僕自身も下半身はビシャビシャで、髪も濡れまくりだ。

あー救急車呼ばないでいいんだった。潜らなかったのに。人騒がせな人だ。あのままどっか遠くまで泳いで、そこから上がったところに服でもあるんだろうか？それにしては長期の潜水をしいられる。ん？そうか、さらにスキューバーセットをこの下に用意していれば、可能か？それならばめちゃくちゃ手の込んだ悪戯だ。ん？テレビ的な何かか？僕はもう一度あたりを見回す。誰もいないし、カメラの気配も無い。十分もここで佇んでたら、普通は種明かしあるよな。やべぇ。まじで、すごい力が動き始めているのかもしれない。夕波の深呼吸恐るべしだな。僕は服をとりあえず持ち上げた。あれスカートが重い。これはスマートフォンとか入ってる感じだ。ん、あ、やっぱり、入ってる。ん？ロックかかってないなコレ。みちゃっていいもんなのかな。あれ、ポケットにお金も入ってる。これって拾得物だよな。これ警察に持って行くのはかなり憚られる。信じてももらえないだろうし、この下着を持って警察はなかなか変態だ。置き紙も拾い上げる。あれ、裏にもなんか書いてある。

『服とか、ポケットの中身は警察に届けないで下さい』

まぁ指示の多いこと。やっぱ家に持って帰るしかないか。カップが大きすぎて、うまく包んで隠すのが難しい。どうしてもレースの紫がもっこりする。でも、まぁ最善はつくした。これで家に帰ろう。びしょびしょだし。

このスマホに連絡が入るってことなんだろう。もう一度会ってみたい。持って帰ろう。

いやー。今日はちょっと動けば、もれなく訳の分からない展開が付いてくるという感じだ。おまけ付きお菓子なら、激レアおまけだな。スカートと、シャツでしっかりと下着を隠して小脇に抱えて家路に着く。ゲームセンターはお預けだな。それにしても桂川。結構匂う。

早く風呂入りたい。臭い。でも、服はいい香りだ。いい香りと川の匂いが混ざる。川の匂いがなければ極楽なんだけど。それにしても、幸せってなんだろ。何にもなかったな。訳の分からない事が一つだけだ。裸が見れたのは幸せか?彼女の服の中のお金は5万円ほど入っていた。スマートフォンは貰えるのか?どっかで返さないと駄目だろう。どうやって返すんだコレ。警察に届けちゃいけないんだろ。

僕は家族にも見つからないように自分の部屋に戻る。珍しく部屋の鍵をかけた。

ぽんっと布団の上に彼女の衣類を投げる。大きなカップの下着が顔を除く。下着泥棒が、これで興奮するのも分からないでもないが、リスクが高すぎる。しかも生身が無いのに捕まるかもしれない事をするなんて馬鹿げている。でも、ときおり目が行く、イカンイカン。僕はささっとシャワーでも浴びようと、風呂場に向かった。裸になってから気付いたが、下着を置いたまま鍵もかけずに風呂にきてしまった。まぁ僕の部屋に勝手に入ることは稀だ。このままシャワーだな。

シャワーが気持ちいい。捨てギターの主に過去・未来へ行ける人に川へ消えた美女。すさま

じい。もう何も起こらないと思ったら、立て続けだもんな。あとは、あの服を返せばちょっとはスッキリする。速く戻ろう。家族に見つかるのは面倒だ。

僕は部屋に戻って来た。まだ大きなカップの下着は顔を出したままだ。これって何カップとか書いてあるもんなのか？あまりブラジャーを見たことが無いので、気になる。背中のところの内側にタグを見つける。ほー何々。片面には生地に関する情報だな。反対側にはＧ７０！Ｇか。Ｇっていうと7段階目か。凄い高みだな。上り詰めた感じだ。でけぇ。アンダーが７０ってことなのかな？これ。結構下も大きいか。腰はもっと細そうだったどな。何々。ショーツはＭか。そういう表記なのか。興味津々にいろいろ見てはいけないものを見てしまった。スマートフォンはロックがかかっていない。アメリカの会社の奴だが。全国シェア約5割のアレではない。検索サービスを提供している会社の奴だな。ちょっとロックを解除した画面を見る。着信履歴とか、受信履歴に新しいモノは無さそうだ。アプリアイコンがところ狭しと並んでいる。あんまり見ない方がいいかな。とりあえず連絡が来るのを待とう。ブラジャーのたたみ方がわからないので、適当だが、自分なりのたたみ方で衣類棚に適当に放り込んだ。洗濯して上げた方が良いのかもしれないが、僕にその度胸はない。眠っていたスマホの充電器を取り出し、充電しながら待ち受けることにしている。

僕は事の顛末を夕波に電話相談することにした。一部始終を説明すると夕波は言った。

「君は変態だな」

いやいや、話の焦点はそこじゃないだろ。
「どうしたらいいかな」
「そりゃあ、携帯をしっかり触るべきかもね。連絡先に本人の住所とか入ってるんじゃない」
そんなことしていいもんなのか？夕波は容赦ないな。
「わかった。触り倒してみるわ」
「いいから、今、触ってみ」
「え？今」
「そう。今」
「わかった」
「まずは連絡先ね」
「あーいっぱい入ってるわ。８００件近くは入ってる。これは、昔だと、連絡先の容量足りなかった奴だな」
「その中に住所入ってる奴があるんじゃない。それか父とか母とか姉兄弟妹」
「なるほどね。でもちょっとソレ大変すぎるわ。少なくとも家族の情報はないね」
「でも、その連絡先のどっかに連絡したら、本人に辿りつくんじゃない？」
「あーそうだね。ちょっとかけてみるか」
僕は、ズラーっとあるスクロールの中から、適当な人の連絡先に電話してみた。そうすると

相手はスグに電話にでた」
「あの、突然ですみません。この番号の人。誰だか分かりますか。今日。渡されたんですけど、取りに来ないんです」
電話の向こうの人は
「いや、電話受ける時、番号しか出てなかったら、わからないね」
「え？」
「知り合いじゃないんじゃないかな」
「え？」
「わたしは、連絡先、聞いたら消さない方だから」
「じゃ間違い番号ってことですかね」
「そうだと思います」
「すみません。ぶしつけな電話をしてしまって、有難うございました」
「いえいえ」
そういうと電話は切れた。
「駄目だね。なんなんだこの電話。この連絡先、ひょっとしてめちゃくちゃなんじゃないかな」
そうやって、夕波の言う通り何件かに電話をしたが、揃いも揃って、同じような返答だ。なんだよこの連絡先リスト。赤の他人で構成されてるって、どうなってんだ。

「その線からの割り出しは難しそうね」
夕波はこのやり方は駄目だと判断したようだった。
「やっぱり、もうちょっと待つしかないんじゃない」
「じゃ、ちょっと待ってみるわ。有難う」
僕は不思議なスマートフォンを角度をいろいろ変えながら見ていた。ここにも訳のわからない物があるってわけか。やっかいだ。
僕は、警察に届けることなく、しばらく所有してみることにした。
夕波。夕波のいない所でもとんでもないことが起こっているぞ。